

石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

— 昆布山谷地区 妙本寺上墓地E地点・G地点 —
虎岸寺跡の石造物調査

平成28(2016)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

島根県と大田市は、平成9年から石見銀山遺跡について発掘調査や文献調査など総合的な調査を行っています。こうした調査成果は、平成19年度に、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の世界遺産登録として実を結びました。そして、登録後もその歴史的位置づけをより一層明らかにするため、調査を継続しているところであります。石造物調査もこの総合調査の一環として当初から取り組んでいるものであり、これまでに銀山400年の歴史の一端を明らかにしてきました。

本書は、平成27年度に実施した、石見銀山遺跡の昆布山谷地区に所在する妙本寺上墓地と虎岸寺跡における石造物調査の成果を報告するものです。

昆布山谷地区は、戦国時代から明治時代にかけて鉱山開発や集落形成がなされたと考えられ、石見銀山の開発初期から江戸時代にかけての盛衰、近代の再開発までの歴史を知る上で重要な地点です。

妙本寺上墓地は、昆布山谷地区では最も広範囲で、かつ多数の石造物が分布する墓地です。今回の調査では、石見銀山の最盛期にあたる江戸時代初頭の墓石群や、鉱山の守り神を記った佐毘売山神社の社家の墓所などが確認されました。また、虎岸寺跡では、江戸時代中期から明治時代にかけて墓地が営まれており、地役人らによって建てられた石塔が確認されました。これらの調査成果は石見銀山の歴史や信仰のあり方を物語るもので、今後の調査研究の基礎資料となるものです。

最後に、この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、本書を今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

平成28年3月

島根県教育委員会

教育長 鴨木朗

例　　言

1. 本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した石造物調査の報告書である。

2. 調査した場所は以下のとおりである。

昆布山谷地区 妙本寺上墓地E地点（大田市大森町ホ363-1）

妙本寺上墓地G地点（大田市大森町ホ363-2）

虎岸寺跡（大田市大森町ニ274、ホ390外）

3. 調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査専門委員会

井上雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課課長代理）

大橋泰夫（島根大学法文学部教授）

勝部 昭（元島根県教育委員会教育次長）

黒田乃生（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）

田辺征夫（公益財團法人大阪府文化財センター理事長）

中西哲也（九州大学総合研究博物館准教授）

仲野義文（石見銀山資料館館長）

原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校教授）

村上 隆（京都美術工芸大学教授）

事務局（平成27年度　島根県教育委員会文化財課）

丹羽野裕（文化財課長） 小塙誠治（世界遺産室長）

熱田貴保（同主席研究員） 内田克己（同企画員） 田原淳史（同企画員）

東山信治（同専門研究員） 矢野健太郎（同主任研究員） 難波正憲（主任）

小杉紗友美（同嘱託職員）

石造物調査指導者

田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）

池上 悟（立正大学文学部教授）

調査参加者

現地調査

（調査指導者） 田中義昭、池上 悟

（立正大学院生） 足立佳代、玉城雄一

（島根県教育委員会） 热田貴保、東山信治、矢野健太郎、小杉紗友美

（大田市教育委員会） 中田健一（石見銀山課長補佐）、山手貴生（同副主任）

矢部俊一（同技師）、渡邊良介（同主事）、

西尾克己、新川 隆、尾村 勝（同嘱託）

4. 実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター（大田市大森町イ1597-3）において保管している。
5. 本書の執筆・編集は東山が行った。
6. 図版1の史料の掲載について、木曾重美氏よりご許可をいただいた。記して感謝申し上げる。

凡　　例

- ・第3表には、石見銀山遺跡の昆布山谷地区に所在する妙本寺上墓地E地点・G地点及び虎岸寺跡の石造物を掲載した。
- ・各石造物の規模は基本的に高さ及び最大幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を（ ）内に記載した。
- ・複数部材からなる石造物の高さは、上の部材の高さ+下の部材の高さ、最大幅は、上の部材の最大幅／下の部材最大幅、と記載した。
- ・銘文は戒名が書かれている面を正面とし、向かって右側を右面、左側を左面、反対側を背面としている。複数の面に銘を持つ場合は、正面) … 右面) … と記載している。
- ・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は〔 〕で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は〔（上欠）〕、〔（下欠）〕と示した。また推定できる文字は□の後に（ か）と表示した。
- ・戒名及び名字は基本的に伏字で○○とした。
- ・実測図を掲載していない石造物についても一覧表に掲載し、今後の研究の資料とした。
- ・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

本文目次

第1章 調査の目的・対象・経緯	1
第1節 調査の目的	1
第2節 調査の対象	1
第3節 調査の経緯	1
第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史	4
第1節 石見銀山の位置と地質学的背景	4
第2節 石見銀山の歴史的背景	4
第3章 調査の概要	6
第1節 調査の経過	6
第2節 調査の方法	6
第3節 昆布山谷地区及びその寺院・墓地の概要	6
第4章 妙本寺上墓地E地点の調査	10
第1節 墓地の立地と石造物の分布	10
第2節 石造物の様相	10
第3節 まとめ	15
第5章 妙本寺上墓地G地点の調査	26
第1節 墓地の立地と石造物の分布	26
第2節 石造物の様相	27
第3節 まとめ	28
第6章 虎岸寺跡の調査	30
第1節 墓地の立地と石造物の分布	30
第2節 石造物の様相	30
第3節 まとめ	32

挿図目次

第1図 石見銀山遺跡全体図	3
第2図 石見銀山遺跡（銀山柵内・大森地区）周辺図	5
第3図 昆布山谷地区周辺図	7
第4図 妙本寺上墓地E地点周辺図	11
第5図 妙本寺上墓地E地点石造物分布図	11
第6図 組合せ宝篋印塔復元想定図	14
第7図 妙本寺上墓地E地点の年代別石造物造立状況	15
第8図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（1）	17
第9図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（2）	18
第10図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（3）	19
第11図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（4）	20
第12図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（5）	21
第13図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（6）	22
第14図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（7）	23

第15図	妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（8）	24
第16図	妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（9）	25
第17図	妙本寺上墓地G地点石造物分布図	26
第18図	妙本寺上墓地G地点 二石宝篋印塔	27
第19図	妙本寺上墓地G地点の年代別石造物造立状況	29
第20図	虎岸寺跡石造物分布図	31
第21図	虎岸寺跡の年代別石造物造立状況	32

表 目 次

第1表	妙本寺上墓地 E 地点 組合せ宝篋印塔分類表	12
第2表	組合せ宝篋印塔基礎の高さ・幅比率	13
第3表	石造物一覧表	33

写真図版目次

図版 1	明治 4 (1871) 年の銀山町社寺絵図面 (木曾重美氏所蔵、一部抜粋)	
図版 2	妙本寺上墓地E地点北側近景	
	妙本寺上墓地E地点中段斜面・下段平坦面 (北東から)	
図版 3	妙本寺上墓地E地点中段斜面・下段平坦面 (南西から)	
	妙本寺上墓地E地点石積み基壇	
図版 4	妙本寺上墓地E地点石造物 (1)	
図版 5	妙本寺上墓地E地点石造物 (2)	
図版 6	妙本寺上墓地E地点石造物 (3)	
図版 7	妙本寺上墓地E地点石造物 (4)	
図版 8	妙本寺上墓地E地点石造物 (5)	
図版 9	妙本寺上墓地G地点 (東から)	
	妙本寺上墓地G地点 (南から)	
図版10	妙本寺上墓地G地点 本城家墓所	
	妙本寺上墓地G地点 二石宝篋印塔	
図版11	虎岸寺跡 境内東側墓地	
	虎岸寺跡 石塔基壇周辺	
図版12	虎岸寺跡石造物	

第1章 調査の目的・対象・経緯

第1節 調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世初頭）、さらには近代へと長期間にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開発から閉山に至るまでに、繁栄期・停滞期・衰退期・近代復興期のあったことが明らかになってきているが、この歴史過程を遺物や構造といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな侧面から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みとその変遷の一端を明らかにすることを目的として実施している。

第2節 調査の対象

一概に石造物といつても①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことがあるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の4つの区分のうち、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）をより直接的に反映するものと考えられることから、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとしている。

第3節 調査の経緯

石造物（墓石）調査は、島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のため、昭和60年度に徳善寺跡などで、天正から慶長年間の紀年銘石塔を中心に一部の確認調査を実施したことが発端となっている。

平成9・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ、各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を抑えるため、紀年銘を持つ墓石の調査が重点的に進められた。墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の3つの調査を総合的に行うこととなつた。

- ①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要箇所について判断材料を得るために分布調査。
- ②特徴的な墓地の構造や変遷を把握するために行う悉皆調査。
- ③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら3つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてのまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的よいなどの条件を満たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選

び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする悉皆調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵光寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆的調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22～23年度は、平成9・10年度に分布調査を行っていた石銀地区の悉皆調査を実施した。石銀地区は石見銀山に於ける初期鉱山業の中心の一角であり、墓Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの悉皆調査を通して、奉行・代官墓にも匹敵する規模の石塔群が樹立されていることが判明した。

平成24年度は、平成24～25年度の落石防護柵設置予定地に本經寺墓地があり、多数の石造物が存在することが確認されたため、こちらの悉皆調査と試掘調査を実施した。

平成25年度は、柄畠谷地区の市道大森三久須線の治山事業対象地である字甚光院周辺に石造物がまとまって存在することが確認されたため緊急的に悉皆調査を実施した。

また、大谷地区の高橋家裏の要害山南麓では、自然災害防止事業の対象地内に石塔が数基確認されたため調査を行った。

落石対策事業等の緊急調査以外には、清水谷地区本法寺跡にある銀山町役人・門脇家墓所と下河原天満宮跡で調査を実施している。

平成26年度は、石銀地区的墓地・石造物の全容を明らかにするため、同地区で未調査であった、墓Ⅰ、墓Ⅱ東、墓Ⅲ東、墓Ⅳ、墓Ⅴの悉皆調査を行った。

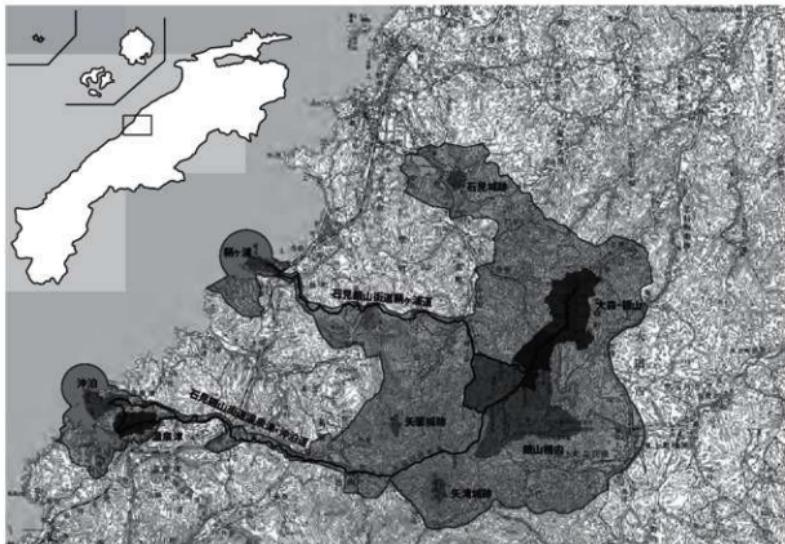
また、柄畠谷地区字甚光院についても、平成25年度調査地に隣接しながらも未調査であった南東側斜面と南側平坦面で悉皆調査を行い、墓域全体での変遷を把握することができた。

平成27年度からは、大田市教育委員会によって発掘調査が進められている昆布山谷地区を調査対象とし、石造物の様相や墓地の年代を明らかにするとともに、同地区の変遷について検討する資料を得ることとした。当年度は、同地区で古い石造物が密集する妙本寺上墓地E地点の悉皆調査を行ったほか、妙本寺上墓地G地点や虎岸寺跡墓地において銘文の調査を実施した。

【参考文献】

- 1 島根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』
- 2 島根県教育委員会他1999「城跡調査・石造物調査・開歩調査編」『石見銀山』第3分冊
- 3 島根県教育委員会他1999「民俗調査・港湾調査・街道調査編」『石見銀山』第6分冊
- 4 温泉津町教育委員会1999『1999 温泉津』
- 5 島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1—妙正寺—』
- 6 島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2—龍昌寺跡—』
- 7 島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3—安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外—』
- 8 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4—長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地(河島家・宗岡家)—』
- 9 島根県教育委員会2004『石見銀山街道一柄ヶ浦・温泉津沖泊道調査報告書—』
- 10 島根県教育委員会2005『石見銀山街道一柄ヶ浦・沖泊集落調査報告書—』
- 11 島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5—分布調査と墓石調査の成果—』
- 12 島根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書6—古墳調査—』

- 跡石造物調査報告書 6—温泉津地区恵疣寺墓所一』
- 13 島根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書 7—温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(1) 一』
- 14 島根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書 8—温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(2) 一』
- 15 島根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書 9—西念寺墓地(3)・安原備中墓・大光寺墓地一』
- 16 大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区 保存対策調査報告書(補訂版)』
- 17 島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10—金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物一』
- 18 島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11—極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区一』
- 19 島根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12—仙ノ山石銀地区墓IIIの調査一』
- 20 島根県教育委員会・大田市教育委員会2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13—本経寺墓地の調査一』
- 21 島根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14—柄畠谷地区字甚光院の石造物調査一』
- 22 島根県教育委員会2014『石見銀山一大谷地区 本経寺墓地発掘調査報告書—【山吹城南西麓の郭遺構の調査】』
- 23 島根県教育委員会・大田市教育委員会2015『石見銀山遺跡石造物調査報告書15—石銀地区墓I・墓II東・墓III東・墓IV・墓Vの石造物調査— 一柄畠谷地区字甚光院の石造物調査一』



第1図 石見銀山遺跡全体図

第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史

第1節 石見銀山の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約180km余りの長い県土を持ち、古代律令制以来の旧国単位では、「出雲」「石見」「隠岐」の3国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置し、現在の行政区分では大田市に所在する。

石見地域では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており、大規模な沖積平野は見られない。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、前期更新世（約100万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要害山、馬路高山などから構成されるこれらの山々は、「溶岩円頂丘」に分類され、粘性が高いデイサイトで山体が形成されている。

仙ノ山の鉱脈は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床という2つの鉱床がある。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まない。また、永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鐵鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀、ピスマスなどが含まれる。

第2節 石見銀山の歴史的背景

石東地域では、近年、開発事業に伴って縄文・弥生時代の遺跡の調査例が増えている。大田市仁摩町の潮川流域にある古屋敷遺跡、五丁遺跡群、川向遺跡などで縄文時代後期以降の遺物・遺構が検出された。弥生時代～古墳時代の集落跡は、大田市鳥井南遺跡や仁摩町大國の庵寺遺跡で確認されている。庵寺遺跡と同所の庵寺古墳群は石見地方で有数の規模の古墳群である。

平安時代前半期の遺跡では、綠釉陶器が出土した仁摩町殿屋敷遺跡や円面鏡が出土した大田市八

石遺跡が注目される。これらの遺跡では中世前期の貿易陶磁も出土し、河口に近い川岸に立地状況から海上交通との関連をうかがわせる。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では、古墳時代の住居跡のほか、奈良・平安時代の建物跡や木簡が多数出土している。

平安時代末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な莊園が成立しており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの莊園、国衙領が成立する。仁摩町天河内の白石遺跡、清石遺跡は、12～14世紀にかけて継続する遺跡で、総柱構造の主屋をもつ住宅遺構が検出されており、貿易陶磁器も一定量出土していることから、在地有力武士層の関与が考えられる。

南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見国守護を兼任するが、応永の乱（1399）で敗れ、石見国守護職を没収される。しかし、義弘の弟・盛見は、応永8（1401）年には大内氏の家督を実力で奪取し、石見国うち邇摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれた。永正年間（1504-1521）に至ると大内義興が石見一円の守護権を奪回した。

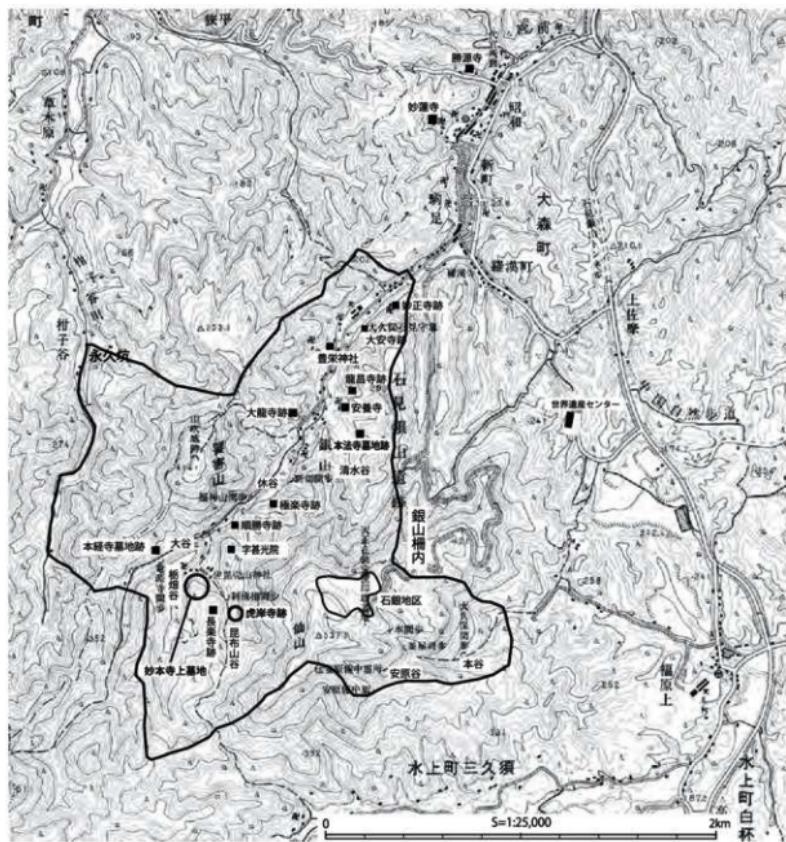
石見銀山は、『銀山旧記』では大永6（1526）年に博多の有力商人神屋寿楨によって発見されたと記されている。大内氏は博多の有力商人と結び、中国との勘合貿易を独占的に行っており、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われるようになった。天文2（1533）年には灰吹法が伝えられ、現地で製錬が行われるようになり、石見銀山の産銀量は急激に増大した。

戦国期には、大内氏や尼子氏、毛利氏により銀山領有をめぐる争奪戦が行われ、それに伴い多数の城館跡が銀山周辺や街道沿い、港周辺に遭されている。1560年代前半には毛利氏が尼子氏との銀山争奪戦に勝利し、石見銀山の支配権を確立した。

江戸期に入ると、石見銀山がある邇摩郡は、周辺の安濃郡などとともに石見銀山附御料に編入され、幕府直轄領となった。江戸初期には、初代奉行、大久保長安の開発により銀山は繁栄期を迎え、この頃の年間産銀量は約10,000貫（約37.5t）と推定されている。寛永期を過ぎると、良鉱が乏しくなったことや、坑道が深くなり湧水処理に多大な経費を要するようになったことにより、採算に合わない間歩は採掘が停止された。延宝元（1693）年以降の記録によると、産銀量は年間約

300貫（約1t）前後で推移し、幕末頃には年間約50貫（0.187t）を下回る状況であった。

明治維新後は、しばらく小規模な経営が続けられたが、明治19（1887）年に藤田組が経営をはじめ、近代的な鉱山開発が行われるようになった。近代の主要商品は銅で、明治後期から大正初期には軍需景気に乗り盛り込みた。しかし、第1次大戦後の銅価格低下を背景として大正12（1923）年に石見銀山は休山した。



第2図 石見銀山遺跡（銀山柵内・大森地区）周辺図

第3章 調査の概要

第1節 調査の経過

昆布山谷地区は、戦国時代から明治時代にかけて鉱山や集落が営まれ、石見銀山遺跡の歴史を考える上で重要な場所である。平成22年度から大田市教育委員会によって発掘調査が行われていることから、平成27年度から石造物調査も同地区を対象とし、墓地や石造物からその歴史的過程の解明を目指すこととした。

4月15～16日には、虎岸寺跡とその背後にある虎岸寺墓地で銘文調査を行い、石造物の種別や年代を把握した。

6月15日には、元島根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏と立正大学文学部教授の池上悟氏を招いて、第1回目の石造物調査指導会を開催し、今後の妙本寺上墓地の調査計画について検討した。当年度は妙本寺上墓地でも古い石造物が多数密集するE地点で悉皆調査を行い、また、佐尾亮山神社社家の墓所などがあるG地点で銘文調査を実施することとした。

島根県教育委員会、大田市教育委員会の職員で7月29日に妙本寺上墓地E地点の下草除去や石造物の清掃を、7月30・31日にG地点の銘文調査を行った。8月28日～29日にかけては、県・市の職員のほか池上悟氏と立正大学院生2名も加わり、E地点の悉皆調査を行った。石造物の点数が膨大であったため、9月から11月にかけて補足的に実測作業等を行った。

現地調査終了後は、図面・写真などの記録類を整理し、12月7日には調査指導会を開催し、当年度の調査成果について総括を行った。

第2節 調査の方法

妙本寺上墓地E地点の悉皆調査では、事前に下草等を除去したうえで、石造物の分布状況を確認し、墓塔・墓標など石造物の番号を付け、大田市教育委員会作成の「石見銀山遺跡地形図」を基におおよその地点を記録した。また、石造物調査

カードを作成するとともに、写真撮影を行った。調査カードには、実物の1/5で石造物を実測し、種類・銘文など必要事項を記入している。銘文を持つもの一部については、拓本を探っている。

なお、今回の調査では石造物の点数が膨大であったため、遺存状態の良くないものや、近世中期以降の墓標についてはカード作成や実測は省略し、石造物の種別・銘文の記録、規模の計測のみにとめた。

虎岸寺跡と妙本寺上墓地G地点の銘文調査では、実測は行わなかったが、石造物の分布状況と種別・銘文を網羅的に記録しており、妙本寺上墓地G地点では規模の計測も行っている。

第3節 昆布山谷地区及びその寺院・墓地の概要

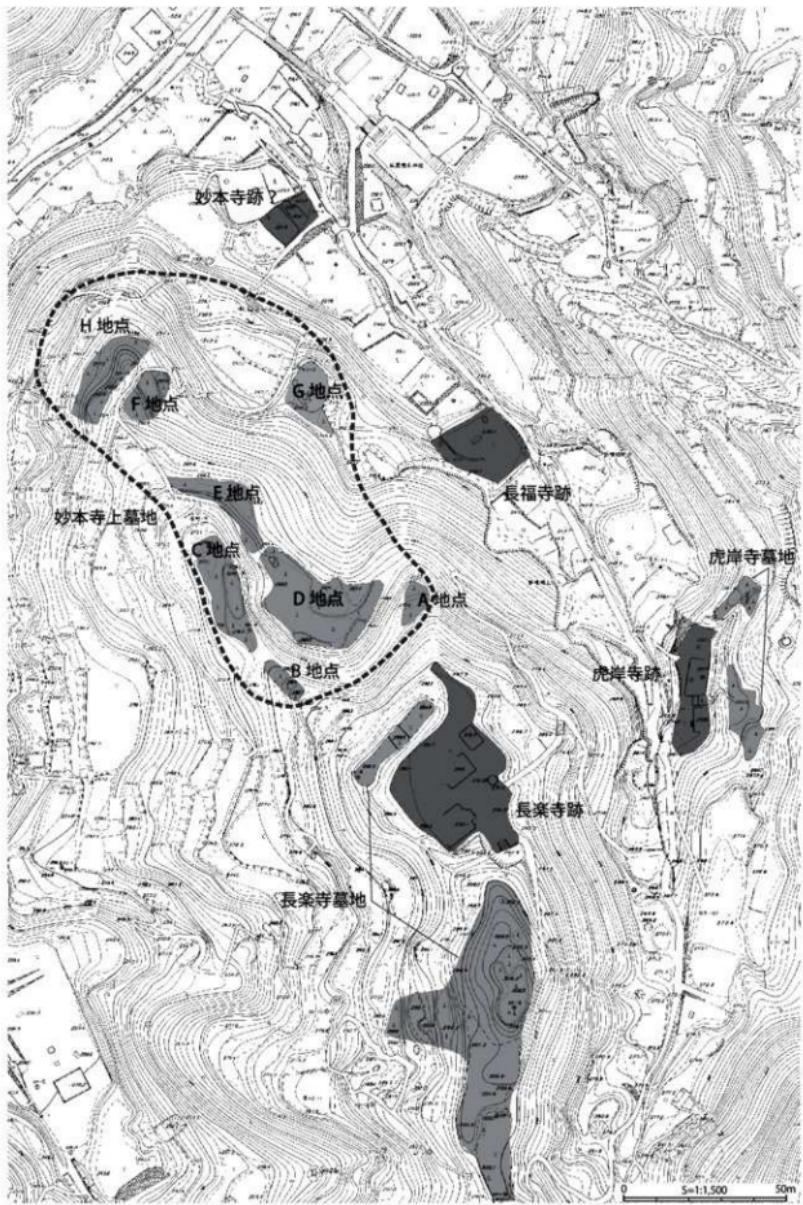
(1) 昆布山谷地区的概要

昆布山谷は、銀山六谷の一つで、仙ノ山山頂から北西の方角に位置している。南北方向に延びる長さ約600mの谷で、佐尾亮山神社の西麓で柄畠谷に合流する。

この谷は、古くは天文年間から新しくは明治期まで、さまざまな史料に登場する。例えば、「銀山旧記」^④、「高野山淨心院過去帳」^⑤には天文年間の記録が見られる。「安田家文書」や「高橋家文書」などには江戸時代における昆布山谷に関する詳細な記録が残されている。幕末～明治期の絵図や切図などには、谷筋の平坦面の細かな情報や道、溝まで詳しく描かれている。また、明治時代の「要書録」(上野寛司氏所蔵)^⑥には藤田組によって建設された鉱山施設も記されている。

また、大田市教育委員会による発掘調査^⑦や分布調査^⑧では、近世前半から明治期までの遺構・遺物が確認されている。

このように、昆布山谷地区は16世紀から明治時代にかけて鉱業活動や集落形成がなされたと考え



第3図 昆布山谷地区周辺図

られるところで、石見銀山の開発初期から隆盛・衰退、近代の再開発までの歴史を知るうえで重要な地区といえる。

谷筋の東西には佐尾壳山神社や長楽寺などの寺社や墓地が存在し、多数の石造物が分布している。発掘調査や文献史料の調査のほか、石造物調査も詳細に進めていくことにより、この地区的変遷について総合的な検討が可能になるものと考える。

(2) 昆布山谷地区的寺院

明治4（1871）年の上知令で、銀山町の各寺社が政府に寺社領を差し出す際に提出した文書と絵図（図版1、木曾重美氏所蔵、以下「木曾家文書」）があり、昆布山谷の谷筋の西側に長楽寺、長福寺、妙本寺、東側に虎岸寺が記されている。これらの概要は以下のとおりである。

長楽寺

真言宗の寺院で、明治12年の「寺院明細帳」（大田市所蔵）によれば、もとは仙ノ山に造立され、その後、年代不詳だが昆布山谷に移転し、明治10（1877）年9月に神宮寺に合併された、と記されている。

境内地は昆布山谷の西側の尾根上にある標高292mの平坦面にあり、寺院建物の基壇が残存している。境内地の北西から南西には土壠状の高まりが設けられている。

長福寺

「寺院明細帳」には曹洞宗とあるが、寺の由緒は不詳である。「木曾家文書」の絵図のほか、寛政年間の「石見国銀山麓絵図」（高橋家文書）でも昆布山谷の西側に描かれている。また、寛政元（1789）年の「両御巡見様之諸事覚書」（上野家文書）^⑩や「木曾家文書」には禅宗寺院として記載されている。

境内地は、「長福寺」の字名から、大田市大森町#366-1に所在したと考えられる。谷筋を通る道沿いにあり、東西13~20m、南北21mの台形状の平坦面（標高238m）が広がっている。

妙本寺

日蓮宗の寺院で、「寺院明細帳」によれば、元亀（1570~1573）年間に日基上人により創立されたが、天明2（1782）年の火災で記録類が焼失したため不詳という。

「木曾家文書」の絵図には、寺は谷筋の道沿いにあり、手前側には橋が描かれている。第3図に「妙本寺？」と示した位置は、そのすぐ北側に橋の基礎とみられる部分があることから、絵図の寺の位置と対応すると考えられる。

虎岸寺

史料によっては「虎岩寺」と表記するものもあるが、ここでは「虎岸寺」を用いる。寺の由緒は不詳だが、寛政元（1789）年の「両御巡見様之諸事覚書」（上野家文書）や「木曾家文書」では禅宗寺院として記載されている。明治4（1871）年の「銀山町未年宗門帳」（高橋家文書）では、銀山町にある虎岸寺の檀家は1戸となっている^⑪。明治10（1877）年頃にはすでに境内地は官有地となっており、官有地払い下げにあたって同20年12月13日付で藤田組が村役場へ提出した文書には、「一、右之内ニ式百七拾四番ハ原ト虎岸寺ト云ヘル小坊アリシカ、元來此寺所得檀家等ノ無キ為維持ニ耐ヘ難ク、明治五六年ノ頃遂ニ破壊シ其後用タル所ナシ」と記されている（上野家文書「要書録」（13-4））。

「要書録」の記述や、「虎岸寺」という字名から大田市大森町#274とその周辺に境内地があったと考えられる。標高257mにある平坦面で、谷筋が通る西側を石垣で区画している。2基の寺院建物の基壇と、その間に挟まれた1基の石塔基壇が残っている。

(3) 昆布山谷地区的墓地

昆布山谷地区では、これまでの調査によって長楽寺墓地と妙本寺墓地、虎岸寺墓地が確認されており、各墓地の石造物の種類と概数が把握されている^⑫。また、長樂寺墓地については平成14年度に悉告調査が行われている^⑬。各墓地の概要とこれまでの調査状況は以下のとおりである。

長楽寺墓地

境内地の北西側にある土壠状の高まりと、境内地の南側に延びる尾根上及びその西側の丘陵斜面に墓地が形成されている。

平成14年度の悉皆調査では、長楽寺跡も含めて212基の石造物が確認されている。境内地北西側の墓地は、歴代住職の墓などから長楽寺に直接関連する墓地と考えられる。一方、南側の尾根上や西側斜面の墓地は、真言宗、浄土真宗、浄土宗、日蓮宗、曹洞宗といった複数宗派の墓石が存在し、共同墓地として営まれたものと推測される。

妙本寺上墓地

長楽寺跡から北西方向に延びる尾根上から東側の丘陵斜面にかけて広範囲にまたがっており、昆布山谷地区では最も広く、また石造物の点数が多い墓地である。

東側の斜面の字名「妙本寺ノ上エ」から「妙本寺上墓地」と呼称されているが、尾根上部の字名は「元西向寺昆布山平」、尾根先端側の字名は「柄畠谷元泉山」である。また、「妙本寺上墓地」と日蓮宗「妙本寺」との関連性も明らかでない。こうしたことから、必ずしも適当な呼び方とは言えないが、名称変更による混乱を防ぐため、これまでどおり妙本寺上墓地と呼ぶこととする。

墓石は全体に万遍なく分布するのではなく、尾根上や斜面中腹の平坦面に多く存在している。ある程度のまとまりが見られるところをA～H地点に分けたが、これはあくまでも便宜的な区分で、A～H地点のほかにも墓石が点在しているところもある。墓域の設定・区分については、今後の調査によって見直しが必要となるかもしれない。

妙本寺上墓地は、平成10年度に踏査で約330基の石造物が確認され⁽³⁾、慶長（1596～1614）年間以前の墓塔が多数存在することで注目された。平成13年度の分布調査では、一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、角塔、無縫塔など総概数で500基近い石造物が確認されている。

虎岸寺墓地

虎岸寺跡の背後の丘陵上で、寺跡の北東側と東

側に造成された平坦面に位置する。

平成13年度の分布調査で、概数ではあるが、組合せ宝篋印塔1基、角塔33基、石仏10基が確認されている。

【註】

- (1) 島根県教育委員会2003『石見銀山史料解説 銀山旧記』
- (2) 田中圭一1999「わが国銀山開発に於ける石見人の役割～『高野山淨心院過去帳』を中心に～」『石見銀山遺跡総合調査報告書』第4冊 島根県教育委員会・大田市教育委員会ほか
- (3) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2016『石見銀山近代史料集 第一集』
- (4) 大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡発掘調査概要20』
大田市教育委員会2013『石見銀山遺跡発掘調査概要21』
大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡発掘調査概要22』
大田市教育委員会2015『石見銀山遺跡発掘調査概要23』
- (5) 尾村鶴2014「石見銀山遺跡昆布山谷地区的土地利用の変遷—文献史料と分布調査成果からみる—」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究4』島根県教育委員会・大田市教育委員会
- (6) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1 妙正寺跡』
- (7) 仲野義文2009『銀山社会の解明 近世石見銀山の経営と社会』
- (8) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書5 分布調査と墓石調査の成果』
- (9) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4 長楽寺跡・石見銀山附地役人（河島家・宗岡家）』
- (10) 島根県教育委員会・大田市教育委員会ほか1999『石造物調査報告書』『石見銀山遺跡総合調査報告書』第3冊

第4章 妙本寺上墓地E地点の調査

第1節 墓地の立地と石造物の分布

妙本寺上墓地E地点は、大田市大森町ホ363-1、字名「妙本寺ノ上エ」に所在する。昆布山谷の西側の丘陵中腹に位置し、上下2段の平坦面（以下、上段平坦面、下段平坦面）とその間の斜面（以下、中段平坦面）を中心にして多数の石造物が分布しており、上段平坦面より上方の斜面（以下、上方斜面）の下部から裾部にも若干存在する。

下段平坦面は標高268～269m、長さ22m、最大幅6mで、南東方向に張り出している。上段平坦面は標高270m前後で、2～3mの幅で南北一北東方向に帯状に延びている。北東側で尾根筋を通る里道とつながり、南北側には一段下ったところにD地点の墓地が広がる。

中段斜面から下段平坦面にかけては、石造物が特に密集している。しかし、石塔部材が散乱した状態で、本来の位置はほとんど分からず。分布密度からすると、これらの全てが元からE地点にあったのではなく、墓地の整理などによって他所から搬入されたものが含まれている可能性も考えられる。

下段平坦面や中段斜面には石造物のほかに、墓の基壇らしき集石・石列や石積みがいくつか見られる。中段斜面南側の裾部には2基の石積み基壇が並んでおり、それぞれほぼ原位置とみられるかたちで、組合せ宝篋印塔の基礎（113・125）が残っていた（図版3下）。

上段平坦面では、無縫塔（39）や一石宝篋印塔（154・155・161～163・165・166）・一石五輪塔（164）が点在し、これらは斜面裾に沿って配置されたように見える。また、南端には墓標が寄せ集められている。上方斜面の下方から裾部にかけては地蔵や墓標、宝篋印塔の部材などがあり、これらは尾根上から転落してきた可能性がある。

第2節 石造物の様相

一石宝篋印塔42基、一石五輪塔12基、組合せ宝

篋印塔35基分以上（相輪35点、笠32点、塔身18点、基礎22点、台座7点）、無縫塔2基、光背形墓標2基、位牌形墓標3基、円頂方形墓標5基、円頂方柱墓標1基、地蔵2基を確認した。

一石宝篋印塔（第8～10図）

42基確認したうち、33基を図示した。相輪の付け根もしくは途中で折れているものが多く、基礎から相輪の宝珠まで残っているものは11基であった。

宝珠の形態は、下部に請花を入れるものと、請花を持たず、中央に溝を入れているものがある。130は九輪下部の請花と基礎の反花が重弁になっている。

12基で紀年銘が確認できた。65は慶長4（1599）年、99は慶長12年、133は慶長13年、108は慶長14年、81は慶長15年、37・64は元和3（1617）年、70は元和7年、91は寛永2（1625）年、104は正保3（1646）年、75・166は元禄10（1697）年であった。13は慶長元号を持つが、年は判別できなかった。

65・161は「童子」・「童女」の戒名を持つ子どもの墓で、基礎底面から笠上面までの高さが50cm未満と小型である。ただし、75・81・108・172のように大人の墓でも小型の石塔は存在する。

戒名や紀年銘のほか、「空・風・火・水・地」（30・161）や「真如大」（64）、梵字で「キャ・カ・ラ・バ・ア」（75・166）と刻まれたものがある。116・133は、塔身の月輪内部に梵字キリーグが彫られている。

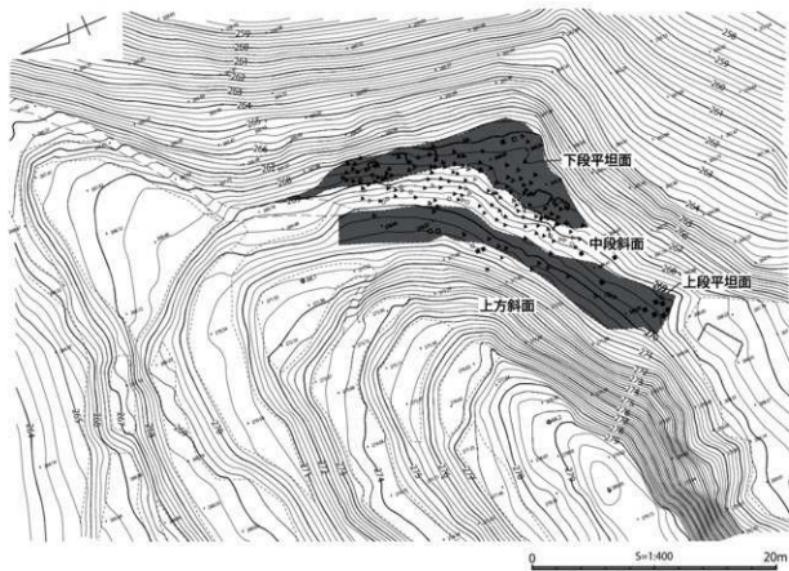
一石五輪塔（第10図）

12基を確認しており、これらのうち7基を図示した。紀年銘を確認できたのは33・62の2基で、いずれも慶長19（1614）年のものである。

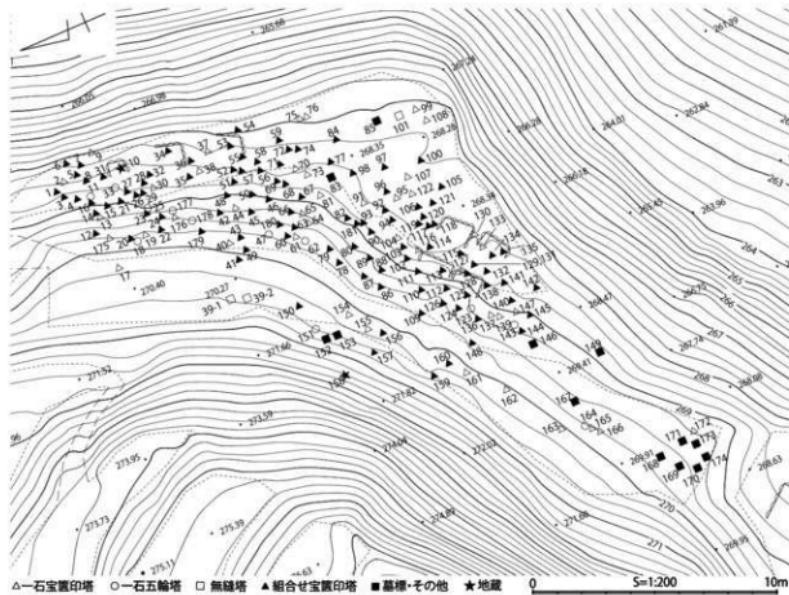
11・18は火輪に梵字が刻まれている。

組合せ宝篋印塔（第11～16図）

組合せ宝篋印塔は、相輪35点、笠32点、塔身18点、基礎22点、台座7点が確認されており、35基



第4図 妙本寺上墓地E地点周辺図



第5図 妙本寺上墓地E地点石造物分布図

第1表 妙本寺上墓地E地点 組合せ宝篋印塔分類表

	大 型	中 型	小 型
相輪	<ul style="list-style-type: none"> 9点 (番号…68・115・1・117・112・102・60・84・69) 伏鉢径26~29cm 高さ73cm以上 いずれも九輪下部に請花を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 10点 (番号…157・27・92・8・54・51・77・31・159・14) 伏鉢径21~25.5cm 高さ52~75cm前後 ほとんどが九輪下部に請花を持つが、31は持たない 	<ul style="list-style-type: none"> 10点 (番号…29・140・52・34・7・128・129・138・106・121) 伏鉢径17~20cm 高さ46~55cm前後 九輪下部に請花を持たない
笠	<ul style="list-style-type: none"> 8点 (番号…45・79・89・114・71・24・124・46) 最大幅53~57cm 高さ35~36.5cm いずれも軒下に請花を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 9点 (番号…74・32・136・41・21・111・35・42・23) 最大幅42~50cm 高さ24.5~31.5cm いずれも軒下に請花を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 12点 (番号…145・110・131・96・49・140・121・160・132・28・6・43) 最大幅30~37cm 高さ18.5~23cm 軒下に請花を持たないものもある
塔身	<ul style="list-style-type: none"> 6点 (番号…88・72・78・119・126・66) 最大幅28~29cm 高さ27~28.5cm 	<ul style="list-style-type: none"> 4点 (番号…3・15・59・26) 最大幅22.5~25cm 高さ22~23.5cm 	<ul style="list-style-type: none"> 8点 (番号…53・150・120・118・134・144・63・103) 最大幅16.5~20cm 高さ15~19cm
基礎	<ul style="list-style-type: none"> 9点 (番号…12・125・97・55・56・94・113・90・148) 最大幅40~44cm 高さ37~42.5cm 	<ul style="list-style-type: none"> 6点 (番号…87・5・57・58・16・36) 最大幅36~37cm 高さ31.5~推定35cm前後 	<ul style="list-style-type: none"> 7点 (番号…100・141・86・20・134・135・109) 最大幅25~30cm 高さ22.5~27.5cm
台座	<ul style="list-style-type: none"> 5点 (番号…80・50・98・125・4) 最大幅66~55cm 高さ8~12cm 受部41.5~47cm 	<ul style="list-style-type: none"> 2点 (番号…67・48) 最大幅53.5~55cm 高さ8.5cm 受部39cm 	—

*番号は伏鉢径、最大幅の大きい順に記載、太字は実測図あり

以上存在したと推測される。いずれも転倒しており、樹立しているものはなかった。

組み合わせを検討するため、まず、各部材を規模によって整理・分類することとした。第11~16図では、部材ごとに最大幅の大きい順に並べた。

また、第1表は、これらを大型・中型・小型に分類し、規模・属性をまとめたものである。

以下に、部材ごとに特徴を見ることとする。

相輪は、いずれも伏鉢と九輪との間に突帶を巡らせており、その上に請花を持つものと持たないものに分類できる。大型品はいずれも請花を持ち、中型品も31以外は請花を持つが、小型品はいずれも請花を持たないものである。157は、九輪に5本の沈線が施されており、宝珠下部や九輪下部の請花の弁数が他のものよりも多く、古い様相を示す。上方斜面の裾で確認したもので、尾根上からが転落した可能性が高い。

笠は、軒下に請花を持つものがほとんどだが、請花がないものが3点 (28・49・43) あり、いずれも小型品に分類される。軒上の段級は2段のものが多いが、24・89・110は3段である。110は軒下の請花の主弁が二重になっている。

塔身は、正面に月輪を持つものがあり、118には内側に梵字が彫られている。120は風化のため内側の文字は判読できない。

基礎は、いずれも塔身を受ける部分がわずかに突出し、その周囲に反花座を持つ。

紀年銘が確認できたものは7基で、94は慶長12年、87は慶長14年、56は慶長15年、109は寛永2年、125は寛永13年、113は寛永18年、141は正保3年のものである。このほか、年の特定はできなかったが、5は「慶長」、16は「元和」の元号が読み取れる。第2表に、高さ・幅が明確なもの年代順に並べて比較した。概ね年代が下るほど幅

第2表 組合せ宝篋印塔基礎の高さ・幅比率

No.	西暦	高さ	最大幅	高／幅
94	1607	37.5	43	0.87
87	1609	31.5	37	0.85
56	1610	39.5	43	0.92
109	1625	22.5	25	0.90
125	1636	42	43	0.98
113	1641	42.5	42	1.01
141	1646	25	30	0.83

に対する高さの比率が大きくなる傾向が見られる。最も新しい141は、これらの中で高さの比率が最も小さくなっているが、イレギュラーなものへの可能性がある。

109は反花の主弁が二重になっており、110とセットになっていた可能性がある。幅が25cmと小型品の中でも最も小さい。戒名に「早世」の二字が見られることから、若年で亡くなった人の墓と考えられる。148は正面に戒名が、背面上には「松谷殿」と銘が刻まれている（図版7）。

台座は、いずれも中央に基礎受部が一段高く作り出されており、その外周に蓮弁が彫られていて。受部上面が彫り窪められているもの（4）と、平坦なもの（48・50・80）がある。基礎との組み合わせを考慮すると、受部の一辺が41.5～47cmのものが大型品、一辺37cm程度のものが中型品に伴うと推測される。

第1表の分類から、組合せ宝篋印塔の相輪から基礎までの高さは、大型品では170cm以上（台座を伴う場合は180cm以上）、中型品では概ね130～160cm程度、小型品では125cm以下になると推測される。部材の分布状況、規模、属性から組合せを想定したものを第6図に示した。

A（112・124・126・125）は中段斜面西側の基礎とその周辺で確認されたもので、相輪から基礎までの高さが192cm程度、台座まで含めると202cm程度になると考えられる。B（115・114・119・113）は、Aに隣接する基礎とその周辺で確認さ

れたもので、総高が195cm程度と推定される。C（69・45・88・94）は中段斜面中央から北寄りの広い範囲で部材が散乱していたが、相輪から基礎にかけて「空・風・火・水・地」の文字が輪郭線を持って内側を浮き上がらせるように彫られていたことから、この組合せを復元した。総高は176cm程度と考えられる。D（14・23・26・36）、E（27・21・15・16）は中型品で、基礎の下部が欠けているが、総高は140～145cm程度になると推定した。F（128・132・134）、G（121・120・100）、Hは小型品で、総高120cm前後になると考えられる。

このほかにさらに多数の組合せが存在したはずであるが、現状では復元は困難である。

部材から大型品が9基以上で、組合せ宝篋印塔の1/3近い割合を占めている。そして、大型の組合せ宝篋印塔の中でも特に大きいものが、石積みの基壇を伴って建てられていることは、この墓地の中でも注目すべきところである。

無縫塔（第16図）

39・101の2基を確認した。39は基礎と塔身がセットになるもので、基礎には慶長19（1614）年の紀年銘と戒名が刻まれている。「大徳」号の戒名から僧侶の墓と考えられる。

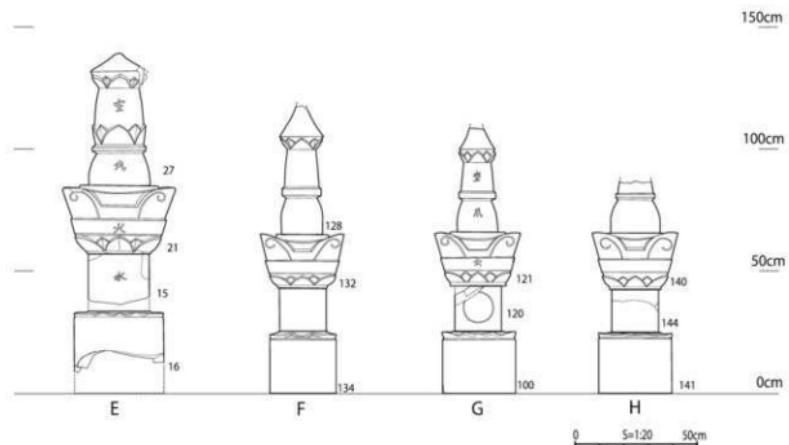
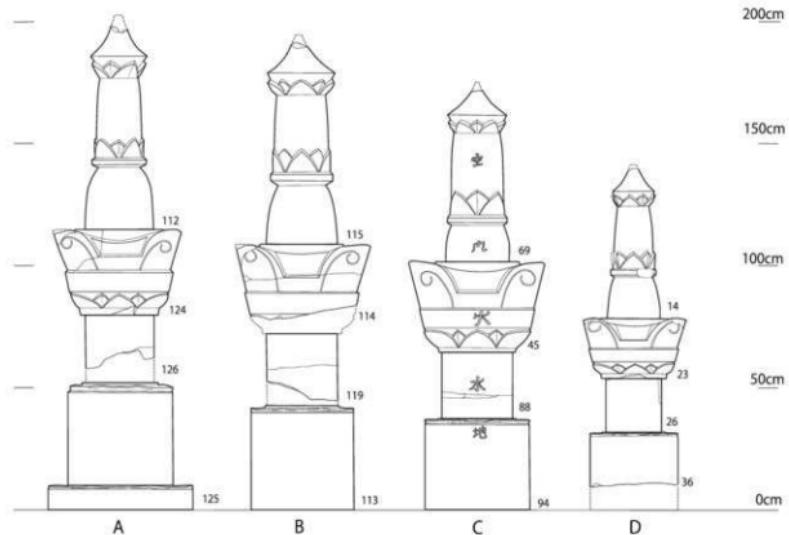
墓標（第16図）

光背形墓標2基、位牌形墓標3基、円頂方形墓標5基、円頂方柱墓標1基を確認し、このうち光背形墓標2基（146・149）を実測した。

146・149は、両側縁が垂直に立ち上がり、左右の上隅で鈍角に屈折しており、頂部が直線的な切妻状になっているものである。正面は中央を割り込んで棒取りしており、下部には蓮弁が彫られている。146の表面は著しく風化しているが、慶長14（1609）年の紀年銘が判読できる。

位牌形墓標では、享保14（1729）年、享保19年、宝暦6（1756）年の紀年銘が確認されている。

円頂方形墓標では、享保9（1724）年から明和8（1771）年の紀年銘が認められた。



第6図 組合せ宝篋印塔復元想定図

円頂方柱墓標は享保9（1724）年銘のもので、墓標正面の一部が打ち欠かれて判読しづらいが、法名の頭に「釋」の文字を持つもののようにあり、浄土真宗の墓石と考えられる。

地蔵（第16図）

10・158の2基を確認した。いずれも光背と蓮華座を伴う立像である。10は宝永7（1710）年、158は享保元号の紀年銘を持つ。158は尾根東側斜面にあり、本来は尾根上に配されていた可能性もある。

その他（第16図）

83は、側面形が台形状を呈し、上面に半球状の突出部を持つ。下面は四角く削り込まれている。上面の突出部がほぞとなり、その上に石塔が置かれた可能性が想定されるが、これまでに類例を見ないものである。

このほか石殿の基底部とみられる部材もあったが、小片のため図示しなかった。

第3節まとめ

墓域の形成と変遷

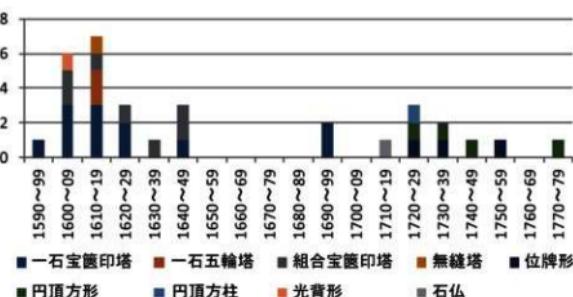
妙本寺上墓地の中でもE地点は、古い墓塔が数多く密集する場所で、同墓地、また昆布山谷地区における墓域の形成を考える上で重要な地点であ

る。今回の調査によって、この地点の石造物の構成と造立状況の変遷を把握することができた。

第7図は、紀年銘石造物の形式・年代別点数を示したものである。石造物の中には紀年銘を持たないもの、あるいは判読できないものもある（特に近世前期の墓塔に多い）ため、絶対数を示すものではないが、造墓状況の変遷を反映しているものと考える。

E地点で最も古い石塔は、慶長4（1599）年銘の一石宝篋印塔である。その後、1600年代～1610年代にかけて造墓数はピークを迎えるものの、1620年代から減少傾向となる。正保3（1646）年から元禄10（1697）年まで、50年余り紀年銘が確認されていない。この間、全く造墓が行われなかつたのか定かではないが、これまでの銀山地区における石造物悉皆調査でも17世紀後半の墓石は少ないことから^①、造墓状況は低調であったと考えられる。以上の傾向は、17世紀初め頃の銀山の繁栄とその後の衰退、それらに伴う人口変動などと対応したものと考えられる。

18世紀前半には、従来の一石宝篋印塔・一石五輪塔・組合せ宝篋印塔に変わって、墓標や地蔵が採用される。こうした点も、これまでの石造物調査の成果で認められる傾向であり、この頃を画期



第7図 妙本寺上墓地E地点の年代別石造物造立状況

として銀山地区全体で墓石の形式や葬制の変化があったと考えられる。

ただし、銀山地区全体では18世紀前半から19世紀初頭にかけて墓石数が順調に増加しているのに対し、E地点では大きな伸びはなく、明和8(1771)年のものが最後となる。

E地点で墓石が飽和状態になったために、他の地点に墓地を求めたのか、それとも昆布山谷地区全体でも同様の傾向を示すものか、周辺地点を含めて調査したうえで検討していくべきものと考える。

墓地と宗派

E地点の墓石のうち、「譽号」の戒名を持つものは、可能性があるものも含めて20基認められ、それ以外に一石宝篋印塔の塔身に阿弥陀如来を意味する梵字キリークが刻まれたものが1基あった。これらは、浄土宗の墓と考えられる。慶長(1596~1615)年間から元禄10年までのものがあり、墓塔のほかにも光背形墓標が1基ある。

一方、頭に「釋」の文字が入る浄土真宗の法名の墓石は、可能性があるものを含め3基認められた。いずれも墓標で18世紀代のものである。これらは、上方斜面の下部や上段平坦面の南寄りで確認されたもので、原位置から動かされている可能性がある。

このほかに戒名は読めるが宗派が特定できないものが8基(うち6基が子どもの墓)あり、それ以外は戒名がないか、判読できないものであった。

以上のことから、E地点は、当初は浄土宗寺院に附属する墓地であった可能性が考えられる。尾根上のC地点の字名は「元西向寺昆布山平」であり、浄土宗寺院の「西向寺」⁽⁴⁾との関連性を想定しておきたい。

大型の組合せ宝篋印塔について

E地点では組合せ宝篋印塔が35基分以上確認されている。大型・中型・小型に分類でき、大型のものは相輪から基礎までの総高がおおむね170cm以上になると推測される。こうした大型品が、相

輪や基礎の数から、少なくとも9基はあり、数・割合とともに、これまでに調査されたほかの墓地と比べても多い。

とりわけ、第6図のA・Bは際立っており、Aは台座も含めた高さが202cm程度、Bは相輪から基礎まで195cm程度とみられる。両者は、中段斜面南側の裾付近に2基並んだ石積み基壇上にそれぞれ建てられており、この墓地の中でも象徴的な石塔として偉容を誇っていたのであろう。

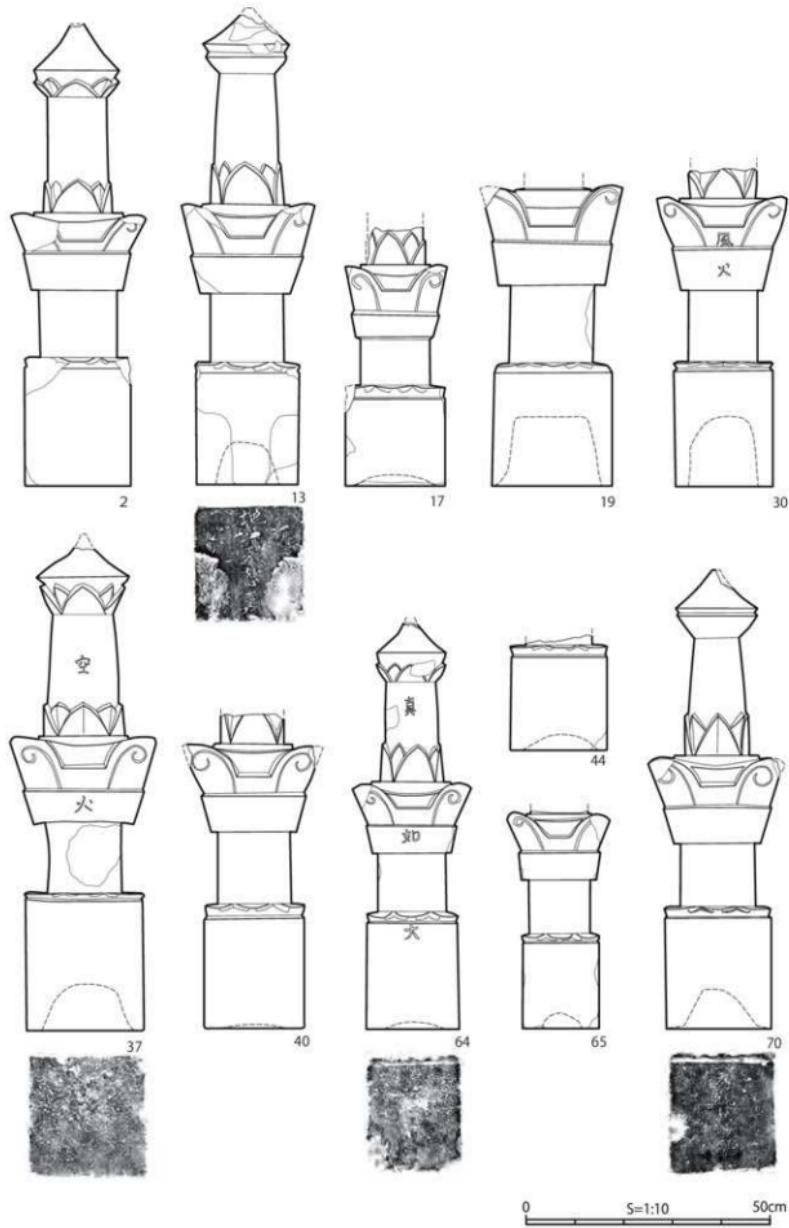
E地点の大型宝篋印塔の造墓者は不明であるが、銀山の最盛期にあたる17世紀前半に、昆布山谷に営まれていることから、鉱山開発と関わりを持った有力者・富裕層の墓であった可能性が考えられる。

【註】

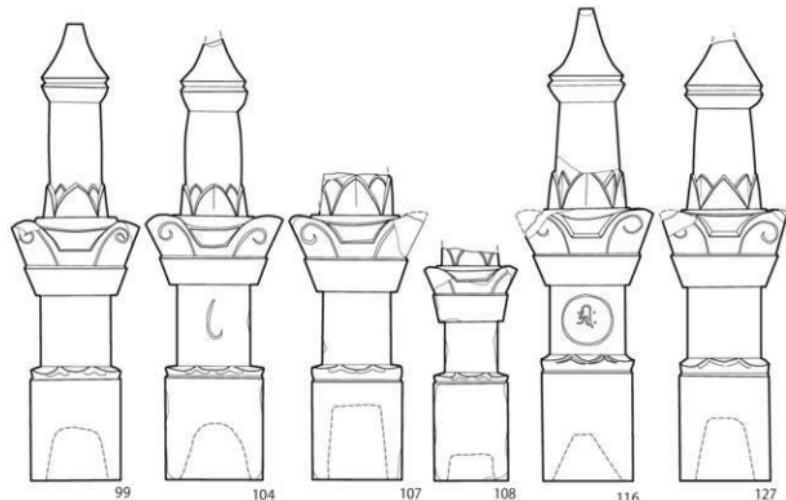
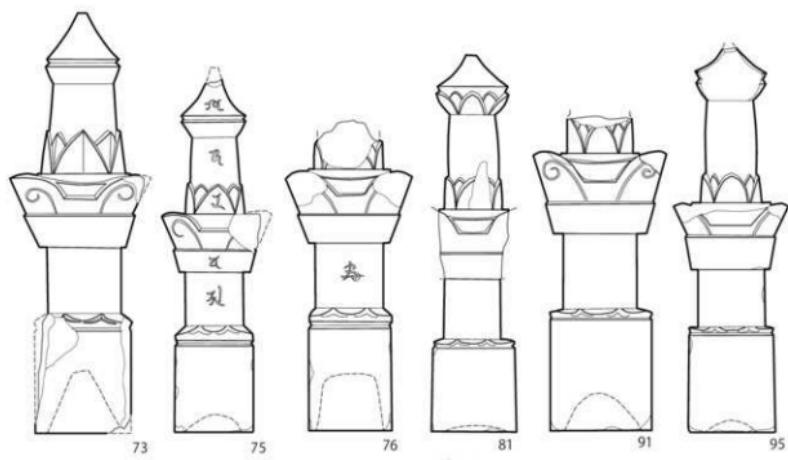
(1) 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書5 分布調査と墓石調査の成果』

(2) 西向寺については、明治12年の「寺院明細帳」に由緒不詳とある。また、『銀山百か寺』(三瓶古文書を読もう会1995)には、昭和22年に極楽寺に合併、同28年に同寺に移る、と書かれている。

なお、「木曾家文書」の絵図では、西向寺は柄畠谷の西側に描かれている。

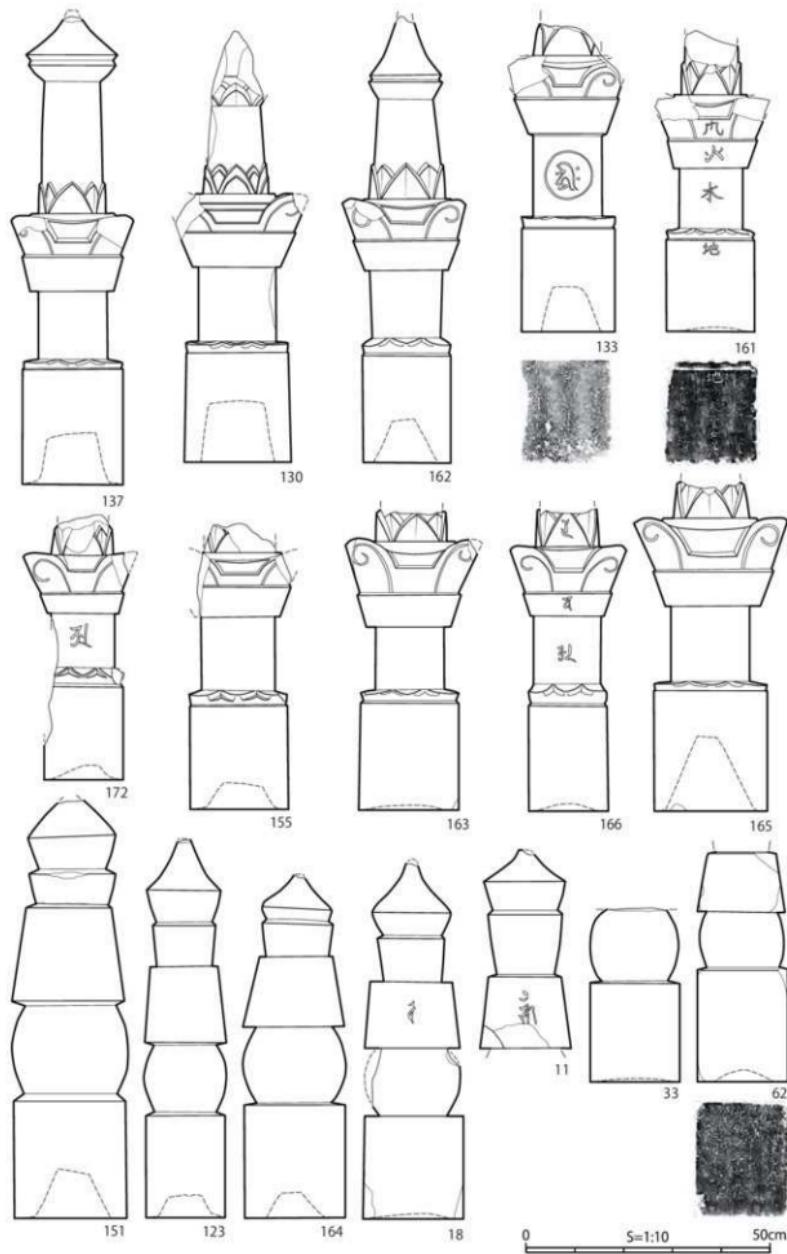


第8図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（1）

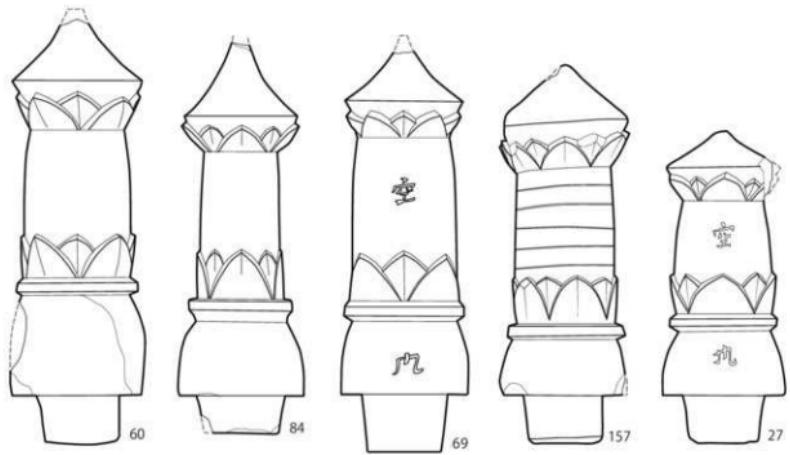
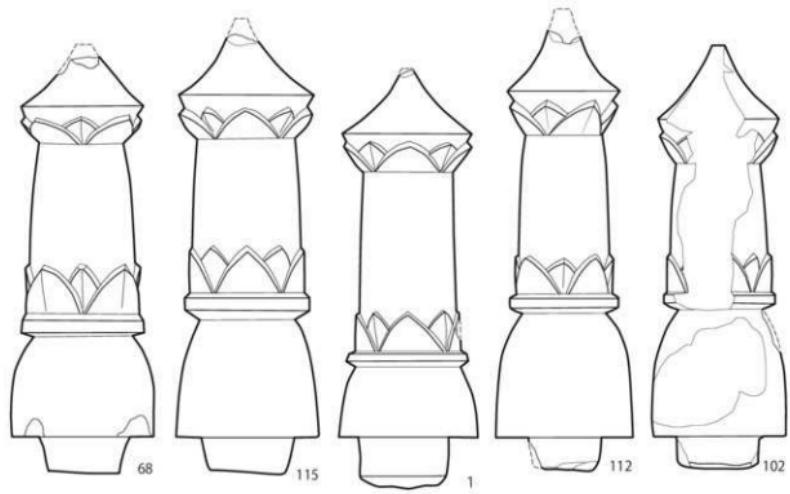


0 S=1:10 50cm

第9図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（2）

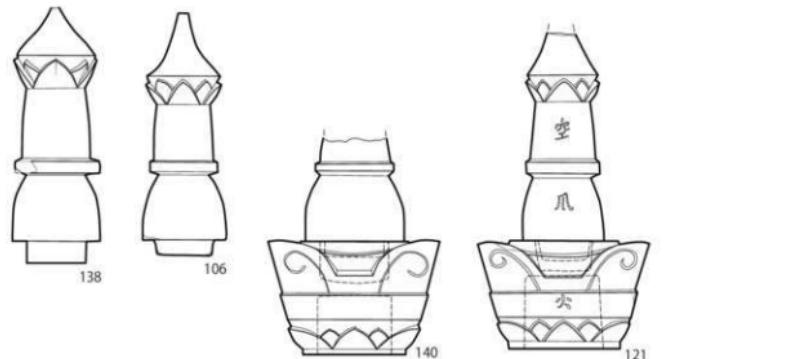
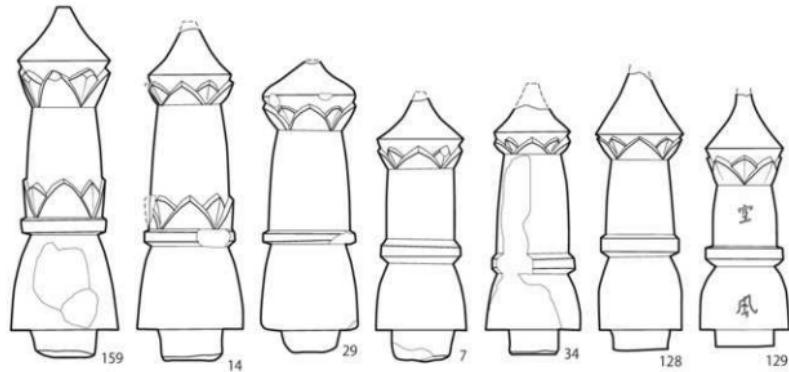
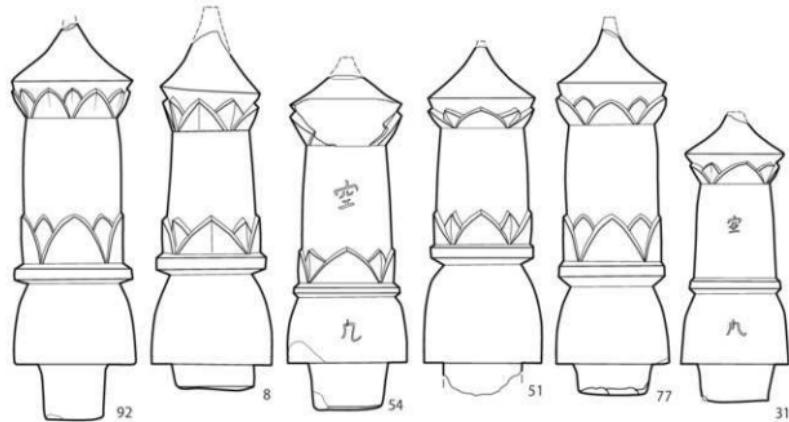


第10図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図 (3)



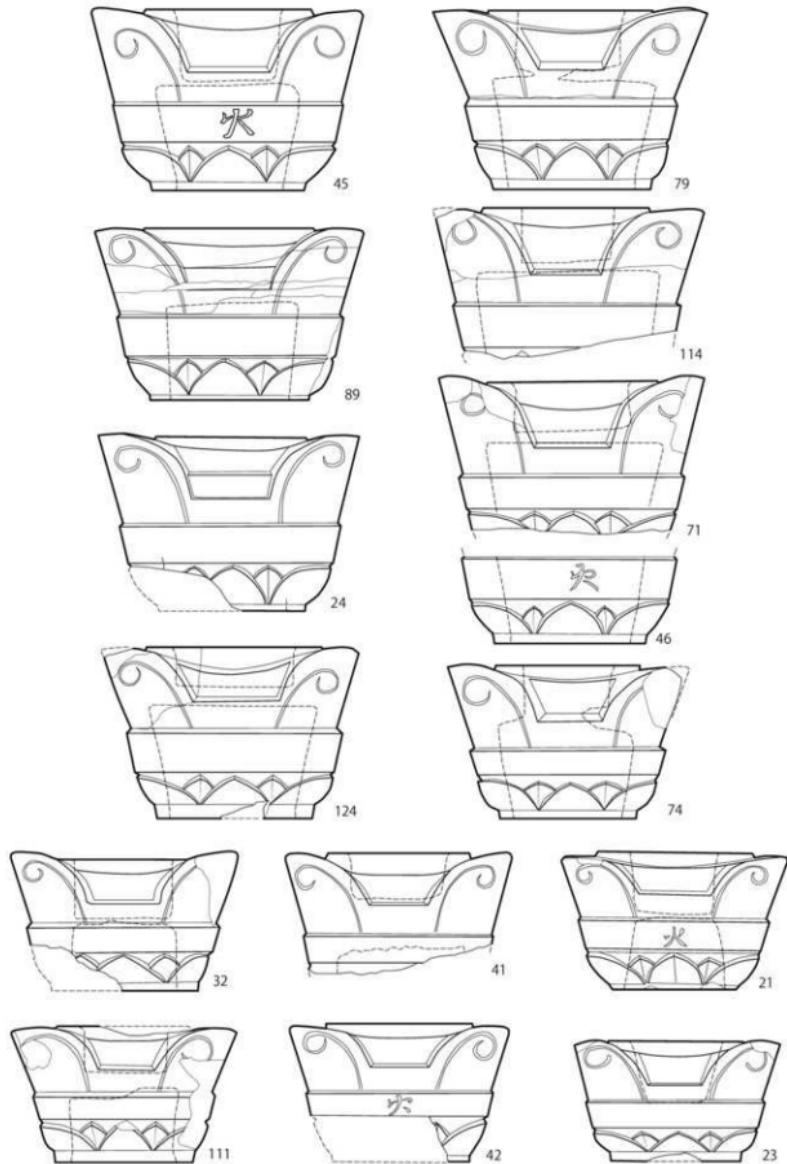
0 S=1:10 50cm

第11図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（4）



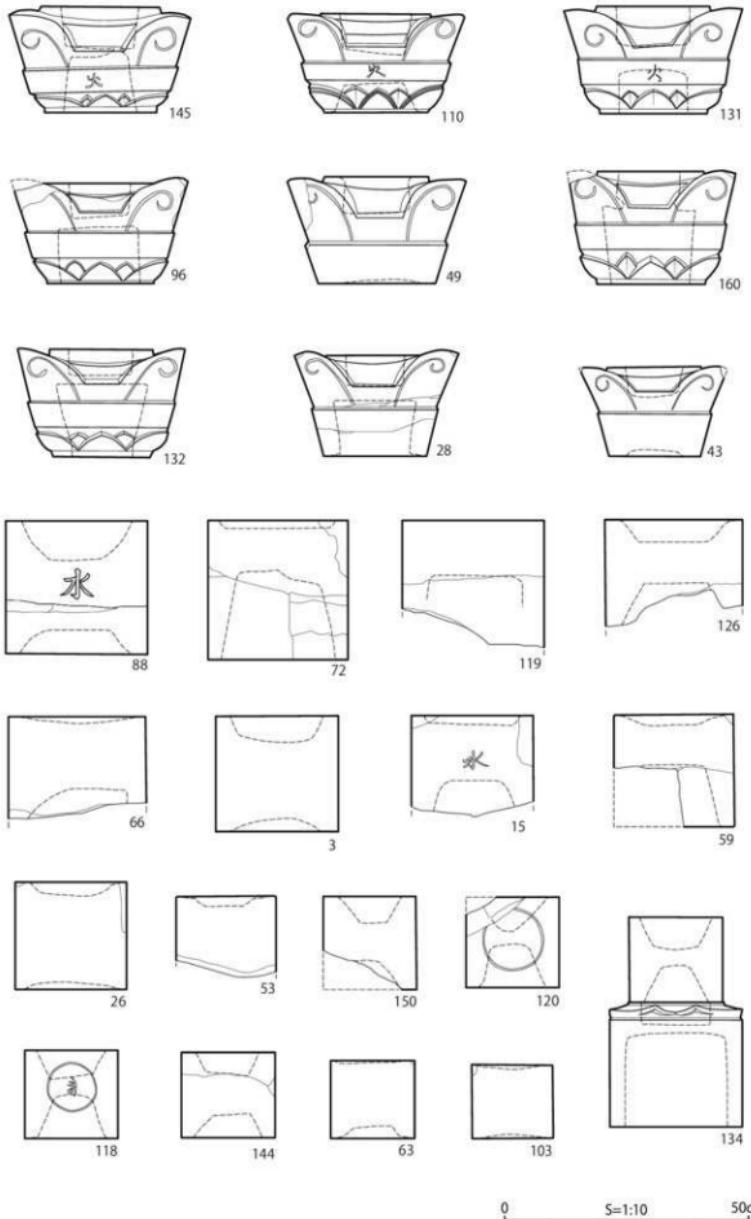
0 S=1:10 50cm

第12図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（5）

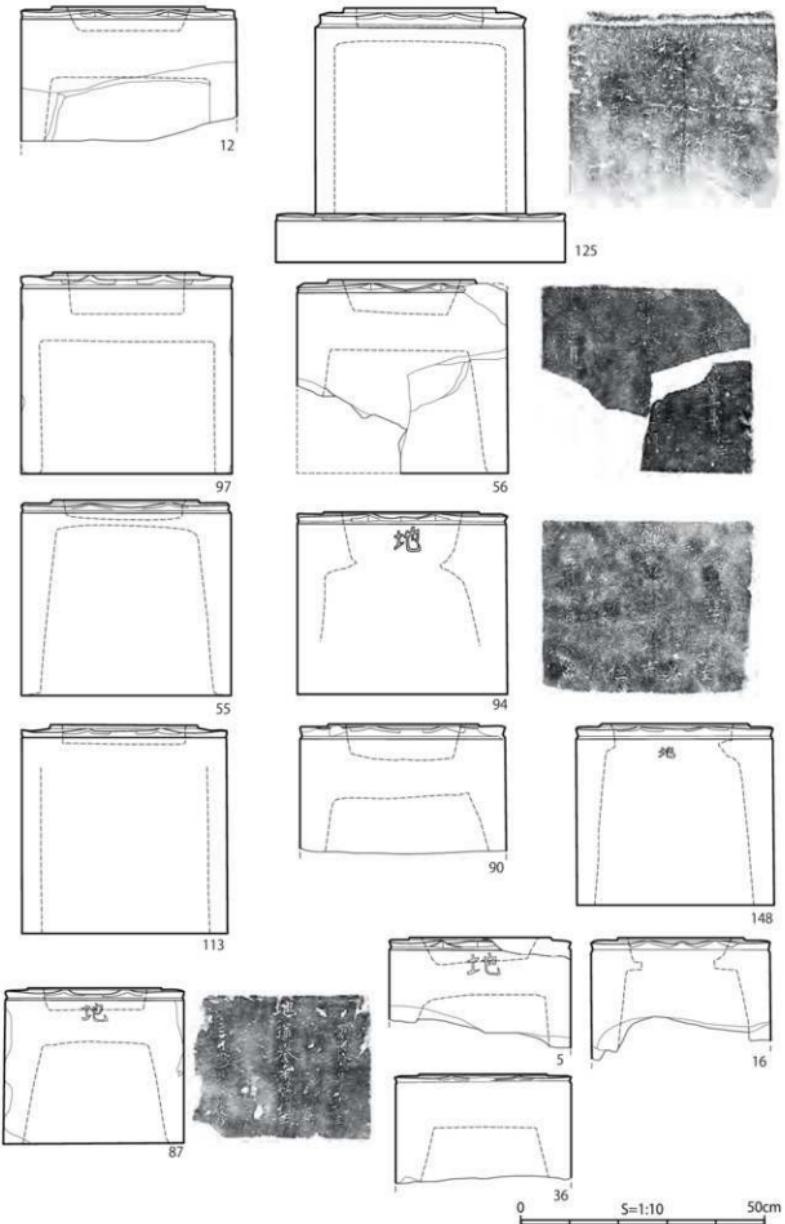


0 S=1:10 50cm

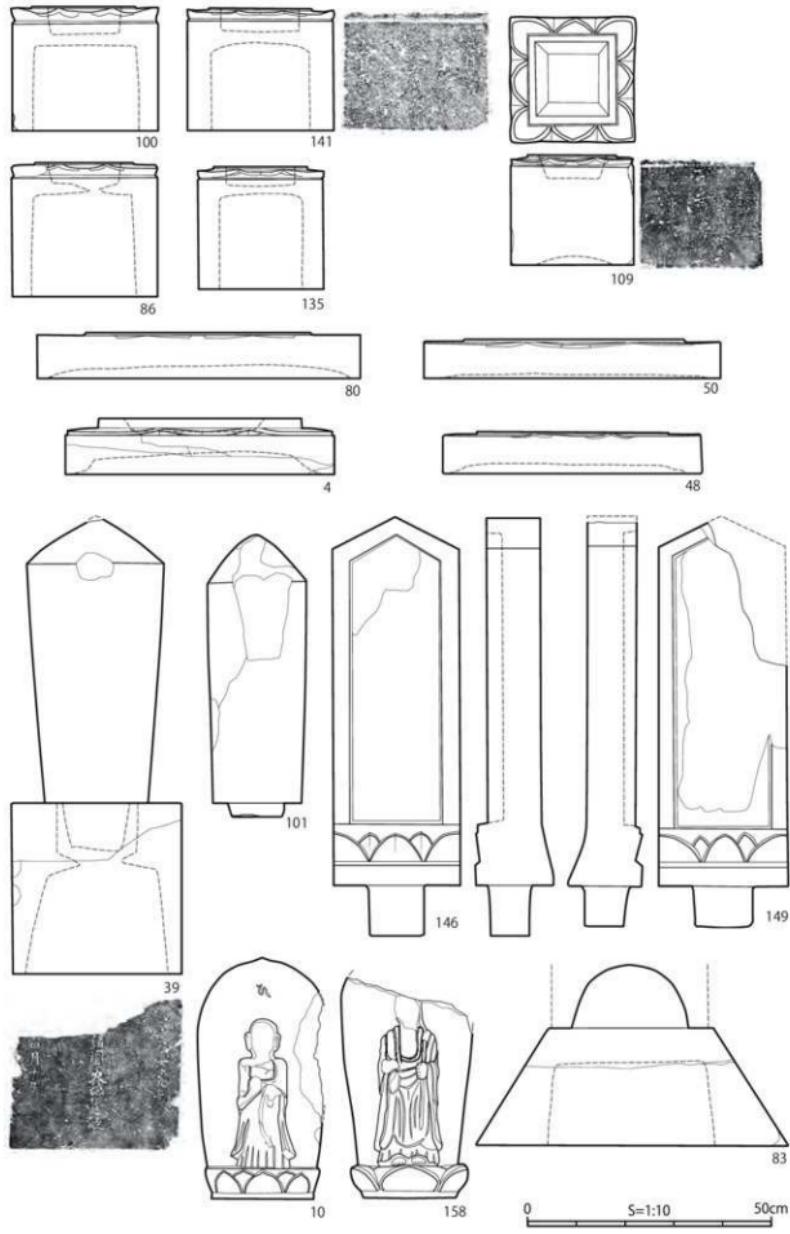
第13図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（6）



第14図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図 (7)



第15図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（8）



第16図 妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（9）

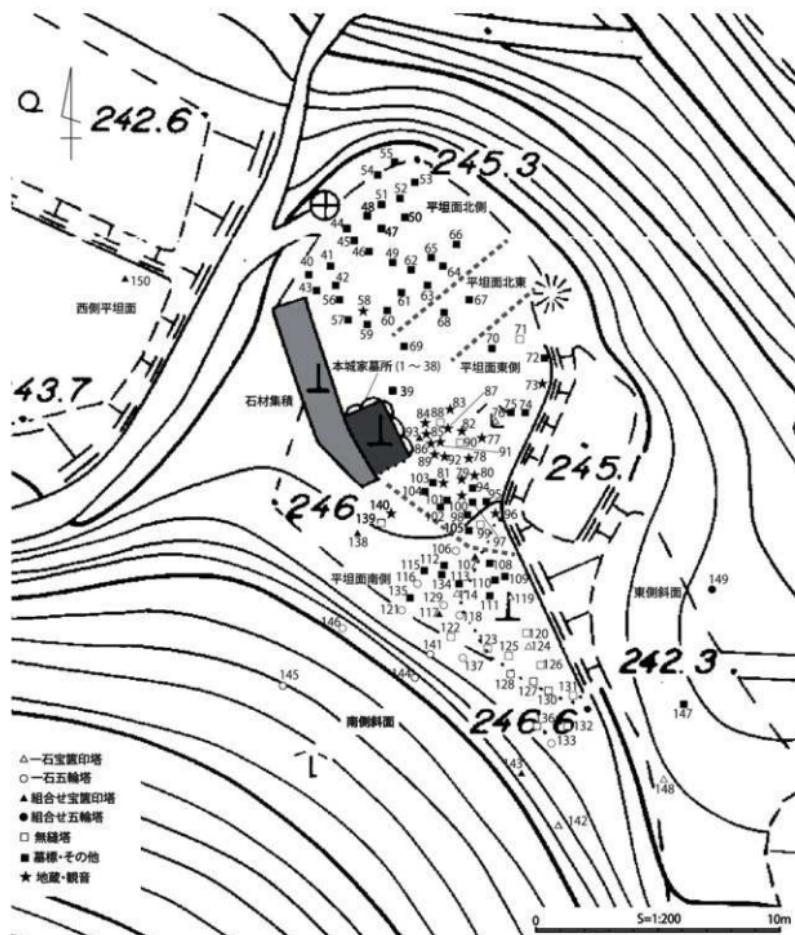
第5章 妙本寺上墓地G地点の調査

第1節 墓地の立地と石造物の分布

妙本寺上墓地G地点は、大田市大森町ホ363-2、字名「妙本寺ノ上エ」に所在する。昆布山谷西側で、丘陵中腹の平坦面（標高245m～246m）に位置

する。ここから約40m南東には長福寺跡がある。

平坦面の中央部には、佐毘売山神社社家の本城家の墓所がある。南北2.72m、東西1.55mの基壇に墓石を集積したもので、中央奥に一石五輪形の



第17図 妙本寺上墓地G地点石造物分布図

供養塔（20）を置き、その左右に5列ずつ墓石を並べている（図版10上）。左側は前列左から順に1～19まで、右側は前列左から順に21～38まで番号を割り振った。

この墓所は、本城家の13代目が他所へ転居したために、墓地を整備し、移靈の祭典を行ったものであることが、供養塔の背面に記されている。なお、これらの中には、本城姓以外に元田姓1基、松原姓6基、矢田姓2基の墓石も含まれており、親類縁者の墓も含めて整理された可能性が考えられる。墓所の北東には12代目によって建てられた灯籠（39）がある。墓所の背後には、墓標基壇の石材が積み重ねられており、整理の際に余ったものを寄せ集めたものとみられる。

平坦面北側では、円頂方柱墓標を主体とする墓石群がほぼ原位置で残っている。

平坦面北東側では墓石は少ないが、平坦面東側に行くと高い密度で分布している。墓標のほかに、石仏が多く、無縫塔も4基見られる。

平坦面南側では、北側・東側と比べて一石宝篋印塔や一石五輪塔がまとまって見られ、無縫塔も7基ある。

G地点の南側の丘陵斜面では、一石宝篋印塔・組合せ宝篋印塔・一石五輪塔（142～146）が点在する。かなり急な地形であるが、石塔のほかに台座や、基壇らしき集石も認められ、南側斜面上にも少しだが墓が造られていたことが分かる。

G地点の東側斜面の裾では3基の石造物が確認された。これらは平坦面から転落したものと考えられる。また、G地点の西側の平坦面では組合せ宝篋印塔の笠が1点認められた。

第2節 石造物の様相

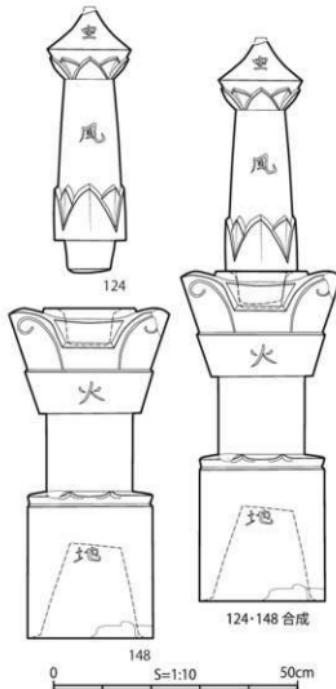
石造物の種類と年代

G地点周辺で確認できた墓石は、一石宝篋印塔4基、二石宝篋印塔1基、一石五輪塔11基、組合せ宝篋印塔4基以上（相輪3点、笠2点、塔身1点）、組合せ五輪塔1基（火・水・地輪各1点）、無縫塔11基（塔身11点、基礎・台座10点）、

位牌形墓標7基、円頂方形墓標31基、円頂方柱墓標35基、笠付方柱墓標1基、尖頂方柱墓標1基、平頂方柱墓標3基、欠損等で分類不明の墓標4基、地蔵14基、觀音3基である。このほか、灯籠2基、石殿部材とみられるものもある。

一石宝篋印塔は、平坦面東側で1基、平坦面南側で2基、南側斜面で1基確認されている。年代の特定できたものはなかった。

二石宝篋印塔は、相輪（124）と一石で作られた笠から基礎部（148）を組合せるものである。124は平坦面南側で、148は東側斜面の下で確認されており、148は平坦面から転落したことが分かる。124は九輪の下に伏鉢がなく、請花が彫られ、ほぞが作り出されている。148は笠の上面にはぞ穴が穿たれている。剥落により判読しづらいが、



第18図 妙本寺上墓地G地点 二石宝篋印塔

「慶長」の紀年銘が刻まれているようである。

一石五輪塔は、本城家墓所の供養塔を除くと、平坦面南側に8基、南側斜面に3基存在する。平坦面南側でも斜面裾付近にあるものは、南側斜面から転落した可能性がある。南側斜面にある146には、寛永12（1635）年の紀年銘が認められた。基礎の上部に「經」の文字があり、「妙法蓮華經」と彫られていたと推測される。

組合せ宝篋印塔は、平坦面東側で相輪1点、南側で相輪・笠・塔身各1点、南側斜面で相輪1点、西側平坦面で笠1点が確認された。基礎はなく、年代の特定できる資料はない。

組合せ五輪塔は、東側斜面の裾で火・水・地輪が確認されたが、平坦面から転落したものと考えられる。無銘のため年代は分からぬ。

無縫塔は平坦面東側で4基、平坦面南側で7基が確認された。享保15（1730）年から安政2（1855）年のものまで見られる。

位牌形墓標は、本城家墓所に2基、平坦面北東側に1基、平坦面東側に3基、平坦面南側に1基存在する。享保（1716～1735）年間と寛延4（1751）年のものが認められた。

円頂方形墓標は、本城家墓所に22基、平坦面北側に3基、平坦面北東側1基、平坦面東側2基、平坦面南側に3基存在する。紀年銘は、享保9（1724）年から昭和3（1928）年まで確認できた。

円頂方柱墓標は、本城家墓所に8基、平坦面北側に23基、平坦面東側に3基、東側斜面裾部に1基存在する。紀年銘は、正徳4（1714）年から昭和11（1936）年まで認められる。

笠付方柱墓標は、平坦面北東側で確認された。笠部と塔身が一石で作られている。破損のため紀年銘は確認できなかった。

尖頂方柱墓標は、本城家墓所で確認された。明治19（1886）年のものである。

平頂方柱墓標は、いずれも本城家墓所にあり、大正～昭和の年号を持つ。

地蔵は、平坦面北側と南側に1基ずつ、平坦面東側に12基存在する。立像は7基、半跏坐像は1

基、坐像が6基見られる。紀年銘は、享保19（1734）年から寛政3（1791）年まで認められた。子どもの戒名が4基あるが、大人の戒名のものも2基存在する。觀音は3基とも平坦面南側で確認された。このうち1基（86）は、天明2（1782）年の紀年銘を持つ。

謹号・戒名

神式の謹号として、「神土」が4基、「神女」、「神靈」、「社土」が1基ずつ認められた。「神靈」は子どもの墓に用いられている。「神土」の1基を除き、いずれも本城家墓所にあった。これらは寛政11（1799）年から安政5（1858）年にかけて見られる。一方で、この間でも本城家の夫人には、「信女」という仏式の戒名が用いられた例も見られる。明治期になると俗名が墓標に記されていたが、昭和期以降は名前の後に「大人」、「刀自」、「姫」という謹号が用いられている。

「枳○○」の法名を持つ浄土真宗の墓は22基確認された。このうち2基は平坦面東側と東側斜面の裾部で確認されたもので、残りの全ては平坦面北側に集中している。寛保元（1741）年から慶応元（1865）年の紀年銘が認められる。

「譽号」の戒名や、梵字キリーグが彫り込まれた浄土宗の墓は3基確認できた。

日蓮宗とみられる墓は、南側斜面上に1基ある。寛永12（1635）年の一石五輪塔である。

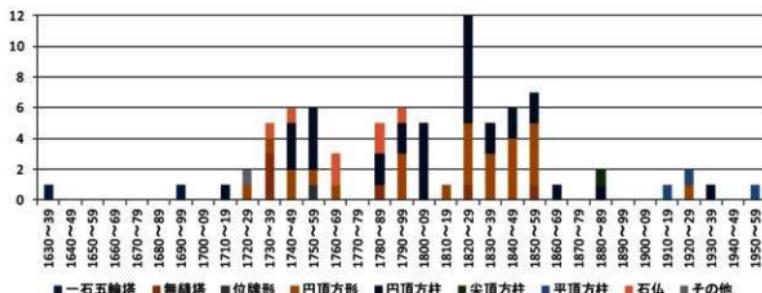
「新歸真」の頭書を持つ墓標は1基あり、禪宗の墓と考えられる。

このほか大人の墓で、戒名がある程度判読できたものの、宗派の特定できないものが18基ある。

なお、無縫塔が11基存在するが、中には、天明7（1787）年銘で「當寺十五代塔」、安政2（1855）年銘で「當山十八古大和尚禪師」、紀年銘はなく「十二世」の銘を持つものがあった。「大和尚禪師」の号から、禪宗寺院の住職の墓と考えられる。

第3節 まとめ

G地点の調査は、実測を行わず、石造物の種別



第19図 妙本寺上墓地G地点の年代別石造物造立状況

や墓碑銘を中心とした調査であったが、石造物の概要や墓地の変遷を把握できた。また、佐尾壳山神社社家の本城家の墓所や多数の無縫塔など、神社・寺院との関連性を見出すことができる。

墓地の変遷

第19図は、紀年銘石造物の形式・年代別点数を示したものである。

G地点周辺で最も古い墓石は、「慶長」元号を持つ二石宝篋印塔で、このほか17世紀代に特定できるものは寛永12(1635)年と元禄4(1691)の一石五輪塔2基のみである。ただし、一石五輪塔、一石宝篋印塔、組合せ宝篋印塔は全部で19基あり、これらは概ね17世紀代に遡るものとみられる。これらの分布状況から、南側斜面や平坦面南側で墓地が形成されたものと考えられる。

18世紀代になると、墓標や石仏（地蔵・觀音）が用いられるようになる。1710～1750年代にかけては増加傾向にあるが、その後は1860年代にかけて増減を繰り返しており、銀山地区全体の傾向とは異なっている。明治期以降に造立されたのは本城家の墓石のみで、昆布山谷の集落が衰退したことを見かがわせている。

墓地と宗教・宗派

G地点では神道や、浄土真宗、浄土宗、禪宗、日蓮宗という様々な宗教・宗派の墓が確認された。

佐尾壳山神社社家、本城家の墓所などで神式謎号の墓標が7基確認された。これらは18世紀末以

降のものである。なお、大森地区にある城上神社社家の墓石調査^①では、「○○命」、「○○命廟」、「○○靈神」、「○○命神靈」といった本城家墓所とは異なる謎号が認められ、神社・社家により葬送儀礼に違いがあったことを示唆している。

淨土真宗の墓は22基確認できたが、ほとんどは平坦面北側に集中しており、他の墓との区分が意識されたように見える。

その他で宗派の特定しうるものは淨土宗3基、禪宗1基、日蓮宗1基で、戒名を判読できたが宗派が不明のものが18基あった。また、住職の墓も含めて11基の無縫塔が確認された。中には「大和尚禪師」と、禪僧をうかがわせるものもあり、G地点の南東約40mにある禪宗寺院、長福寺との関連性が想定される。禪宗の墓は、淨土真宗・淨土宗のものと比べて特徴を捉えがたく、宗派不明とした墓の多くは禪宗の墓の可能性がある。

以上から、E地点では禪宗長福寺に附属する墓地が営まれた一方、いわば棲み分けをするように淨土真宗信徒の墓が造られたと考えられる。また、18世紀末から神社社家で神式謎号が用いられるようになったことで、墓地の中での多様性がより顕著になったのである。

【註】

(1) 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5—分布調査と墓石調査の成果—』

第6章 虎岸寺跡の調査

第1節 墓地の立地と石造物の分布

虎岸寺跡は、大田市大森町ニ274、字名「虎岸寺」に所在する。昆布山谷の東側にある、南北37m、東西8m、標高257mの平坦面が境内地の跡で、谷筋に面した西側を石垣で区画している。南北にある2基の寺院建物の基壇に挟まれて、石塔の基壇が残っていた。この周辺では、組合せ宝篋印塔の部材や、石仏2基、墓標1基が確認できた。

虎岸寺跡の背後には急な斜面が迫っているが、東側に標高263mまで登ったところに南北20m、東西10mの平坦面があり、70点余りの墓石が確認された。北側では列状に墓石が配され、本来の位置関係が分かるが、南側の幅が広いところでは墓石が散乱し、原位置はほとんど分からぬ。戒名が削られた墓石も多く見られる。この南東へ2m程登ったところにも平坦面がある。現状では石造物はないが、ここから転落したとみられる石造物も存在する。

境内東側の墓地から15m北側、標高264～265mの位置にある平坦面周辺では墓標2基、地蔵の基礎1基、台座2点、さらにその下の標高約260mの平坦面では地蔵の基礎1基が確認された。

第2節 石造物の様相

石造物の種類と年代

虎岸寺跡とその背後の墓地では、一石五輪塔1基、組合せ宝篋印塔1基、位牌形墓標1基、円頂方形墓標27基、円頂方柱墓標28基、突頂方柱墓標1基、地蔵12基（像12点、基礎6点）以上、觀音2基を確認した。

一石五輪塔（26）は、享保5（1720）年の銘を持つもので、この地点では最も古い石塔である。

組合せ宝篋印塔は、境内地の石塔基壇周辺で確認されたものである。転倒して部材が散乱していたが、全体の組み合わせは復元できる。切石積みの基壇上に、2つの切石を組み合わせて基壇最上

部をつくり、その上に正方形の板石、上下に蓮弁が彫られた台座を置き、基礎から相輪まで組み合わせるものである。笠が大きく開き、塔身には蓮華文や月輪が陽刻され、その内側に金剛界五仏種子の梵字が刻まれている。石材は福光石である。基壇最上部の石材には銘が彫られており、「興中」のあとに8人の名前が、そのあとに「法口施主」の丸茂久右衛門の名前と「享保十一（1726）年三月吉日」の日付が見える。丸茂久右衛門は、享保13年に銀山附役人の組頭・銀蔵役・諸役所立会を勤めていたことが山中家文書に記されている^⑩。なお、丸茂以外の8人の名前は削られていて、明確には判読できない。

位牌形墓標は、享保6（1721）年の紀年銘が確認された。風化が著しいため明確ではないが、正面の棒取り中に地蔵が彫られているようである。

円頂方形墓標は、宝暦10（1760）年から明治25（1892）年、円頂方柱墓標は、寛保2（1742）年から明治45（1912）年にかけて見られる。突頂方柱墓標は、明治41（1908）年のものである。

地蔵は、寛延2（1749）年から文政2（1819）年のものが確認された。子どもの墓が7基と多いが、大人の墓も3基で確認できた。12基のうち1基（78）のみ立像で、ほかは坐像である。78は、平板的な像形で、このようなものはあまり例を見ない。石塔基壇周辺にあったものである。

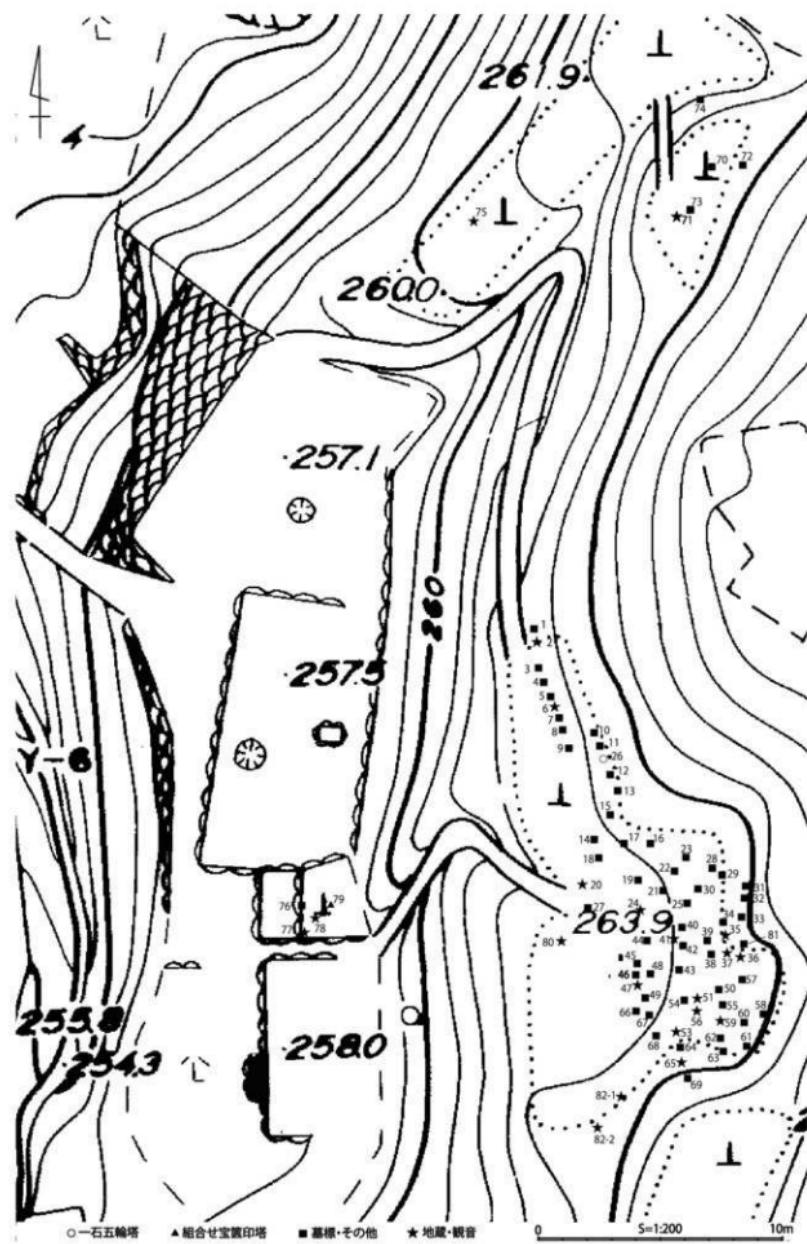
觀音は2基とも「信女」の戒名を持つ。このうち1基に明和9（1772）年の銘が確認された。

戒名・法名と宗派

「釈〇〇」という浄土真宗の法名を持つ墓が25基あり、このうち20基が円頂方柱墓標、5基が地蔵である。

梵字キリーグや、「誓号」戒名を伴う浄土宗の墓は、8基を確認している。

また、戒名は判読できるが宗派の不明な墓は、7基あった。史料では虎岸寺は禪宗と記されており、これらは禪宗の墓の可能性がある。



第20図 虎岸寺跡石造物分布図

このほかに戒名が打ち欠かれていて、宗派が特定できない墓も多く存在する。

第3節まとめ

墓地の変遷と性格

第21図に、紀年銘石造物の形式・年代別点数を示した。最も古いものは享保5（1720）年銘の一石五輪塔だが、これ以降は墓標が主体に造立される。また、18世中頃から19世紀初め頃までは石仏も墓石に使用されている。造墓数は、18世紀前半から19世紀初頭にかけて波はあるものの増加傾向で、その後は19世紀中頃に向けて減少し、19世紀後半以降は極めて低調である。これまでの石造物調査の傾向と概ね対応するものといえる。

文献史料では虎岸寺は禪宗寺院として記録されているが、石造物には浄土真宗や浄土宗の墓が多数認められ、共同墓地的な様相が窺われる。木曾家文書の絵図（図版1）では、虎岸寺の背後（東側）は他人の所有地となっている。元々、寺の所有地でなかったため、寺の管理が及ばなかったのかもしれない。なお、明治期の早い段階で虎岸寺は廃寺となるが、背後の墓地では明治末年まで造墓が行われている。

組合せ宝篋印塔について

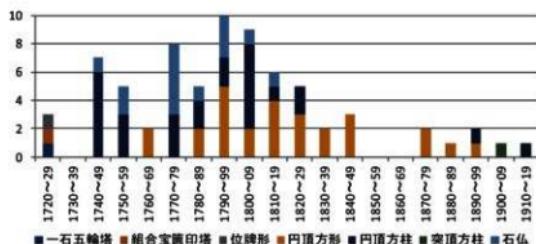
今回の調査では、地役人の丸茂久右衛門ほか8人によって建てられた組合せ宝篋印塔が確認された。この宝篋印塔は、石見銀山で近世前期に一般

的に見られるものとは、大きく形態が異なるもので、別系譜のものと考えられる。これと類似するものは、柄畠谷地区宇甚光院の愛宕社⁽²⁾や温泉津地区の金剛院墓地⁽³⁾で確認されている。また、羅漢寺には、同様の形態で、花崗岩製の宝篋印塔がある。この塔は、江戸湯島にある靈雲寺の光海によって、田安宗武とその夫人の供養塔として、明和8（1771）年に建立されたもの⁽⁴⁾であることから、中央の石塔型式と考えられる。虎岸寺跡の宝篋印塔はこれよりも古いもので、いち早く中央の型式を取り入れて製作されたものと評価できる。

この石塔は、特定個人の墓ではなく総供養塔として造立されたものと推測され、地役人と地域社会、寺院との関わりを考える上で注目される資料である。

【註】

- (1) 島根県教育委員会2005『石見銀山歴史文献調査報告書
石見銀山附地役人由緒書』
- (2) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山
遺跡石造物調査報告書14-柄畠谷地区宇甚光院の石造物調
査一』
- (3) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山
遺跡石造物調査報告書10-金剛院墓地・本谷地区周辺・中
正路の石造物一』
- (4) 烏谷芳雄2004「羅漢寺五百羅漢の造立棟札」『石見銀山
ノート3』島根県教育委員会・大田市教育委員会



第21図 虎岸寺跡の年代別石造物造立状況

凡 例

- ・石見銀山遺跡の昆布山谷地区に所在する妙本寺上墓地E地点・G地点及び虎岸寺跡の石造物を掲載した。
 - ・各石造物の規模は基本的に高さ及び最大幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を()内に記載した。
 - ・複数部材からなる石造物の高さは、上の部材の高さ+下の部材の高さ、最大幅は、上の部材の最大幅/下の部材最大幅、と記載した。
 - ・銘文は戒名が書かれている面を正面とし、向かって右側を右面、左側を左面、反対側を背面としている。複数の面に銘を持つ場合は、(正面)…(右面)…と記載している。
 - ・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は〔 〕で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は(上欠)、〔 下欠)と示した。また推定できる文字は□の後に(カ)と表示した。
 - ・戒名及び名字は基本的に伏字で○○とした。
 - ・実測図を掲載していない石造物についても一覧表に掲載し、今後の研究の資料とした。
 - ・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

									備考	
40	39	38	37	36	35	34	33	32	報告番号	
円頂方柱基標	円頂方形基標	円頂方形基標	地蔵	地蔵 (墓碑)	地蔵	地蔵	円頂方柱基標	円頂方柱基標	種別	
									高さ 最大幅	
									鉢 文	
左面 右面 正面 背面 俗名久石衛門	右面 正面 背面 正面 右面 左面 正面 背面 天保九年庚 長治郎子	右面 正面 背面 正面 右面 左面 正面 背面 正元子 二月十日	右面 正面 背面 正面 右面 左面 正面 背面 文化十二庚 ○清光 九月廿一日 天保四年 長松子	右面 正面 背面 正面 右面 左面 正面 背面 四才口 卒(か)	右面 寛政十二申 十月五日 十六年庚辰 銀○信女 八月廿八日 正元子 立之 宗助 三月四日 左面 立之	右面 寛政十二申 十一月八日 正元子 左面 立之 宗助 三月四日 左面 立之	右面 ○清光 九月廿一日 天保四年 長松子	右面 ○清光 九月廿一日 天保九年庚 長治郎子	正面 釋迦 尼○ ○兼松 立之	正面 釋迦 尼○ ○兼松 立之
撮 正面枠取り 正面上部欠	正面の蓮華文	正面の蓮華文	蓮華座の上に坐る像。 蓮華と像が一体でつくり いる。基礎に露す。	蓮華座の上に坐る像。 蓮華と像が一体でつくり いる。基礎に露す。	蓮華座の上に坐る像。 蓮華と像が一体でつくり いる。基礎に露す。	蓮華座の上に坐る像。 蓮華と像が一体でつくり いる。基礎に露す。	蓮華座の上に坐る像。 蓮華と像が一体でつくり いる。基礎に露す。	正面枠取り。 正面上部欠	正面枠取り。 下部に施刻 の蓮華文。	
1744	1838	1815	1800	1778	1792	1776	1795/1800	1808	西歴	

			埠局番号
	149		報告番号
(35) 組合せせ箇印塔	地 盤 ・ 火 輪 ・ 水 輪 ・	組合せ 五輪塔	種 別
325	225+20+24		高さ
49	355/295/26		最大幅
			銘文
		上方 から 新設 したものと 考 え ら れ る	備 考
			西暦

										持回番号	
101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	報告番号	
位牌形基標	地蔵	無縫塔 (運身・基礎)	石碑 (屋根)	円頂方柱基標	地蔵	位牌形基標	不明基標 (羽子板形)	組合せ宝篋印塔 (相輪)	地蔵 (像・基盤)	種別	
62	(27)	59+24.5	17.5	41	32.5	(70)	(45.5)	50	(22.5)+19.5	高さ	
38	15	245/27	47×30	19	20.5	40	26	17.5	205/23	最大幅	
		基礎左面	内方	正面 〔左面〕	正面 〔右面〕	〔本カ〕	〔掌保カ〕	正面 〔上凸〕	正面 〔下凹〕	基礎正面	
		五月 廿日	乙卯	塔身正面 位牌正面 基础右面 安政五年	正徳四年七月十七日	○	○	○	○	明和五年 四月十七日 〇〇氏	
ていてる。	正面持取り。	立像、風化している。		正面持取り	正面持取り	立像か? 風化が激しい。	正面持取り の通筆文。	正面向持取り、下部に陰刻 がある。同一個体の可動性が ない。	幅が広く、羽子板状 になつてゐるが、正面向持 取りは欠角井、下部に陰刻 がある。下部に陰刻がある。 羽子板下部が厚い。	伏牕上には開花がない	坐像、頭部欠損
				1855	1714			1723		西暦	

												持因番号		
												報告番号		
80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	種別	
地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	一石室圓筒印塚	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	地蔵	円頂方形墓標	無縫塔 (塔身・基壇)	位牌形墓標	円頂方形墓標	笠村方柱墓標		
(16.5)	(27)	(33.5)	(21.5)	80	40	31	(25)	30	36.5+15.5	45	54	50	高さ	
24	26	21.5	24	23	18	17.5	22.5	14	18/22	17.5	21	26.5	最大幅	
				正(面) 右(面) 四月廿五日	正(面) 右(面) 四月廿六日			正(面)「 」信士	基壇正面 ○○○○ 九月廿八日 品位	正(面) 右(面) 三月二十日 信士	正(面) 右(面) 三月二十日 信士	正(面) 右(面) 四月十六日 信士	正(面) 右(面) 四月十六日 信士	銘文
				上(区) 口生信士	上(区) 天									備考
立像	立像	立像	立像	塔身に梵字キリーグ	正面枠取り の蓮華文 はぞあり、 下部に陰刻	正面枠取り の蓮華文 はぞあり、 下部に陰刻	立像	はぞあり、 正面枠取り	下部に密刻の蓮華文、 正面枠取り はぞあり、 下部に陰刻	下部に密刻の蓮華文、 正面枠取り はぞあり、 下部に陰刻	正(面)と左側の一部を削 る。台座は2段	笠と塔身が一石作りのもの。 内側は凹状にもう 大きく削られれている。		
					1736				1731	1751	1798		西壁	

										備考	
31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	備考	
円頂方形墓標	円頂方形墓標	尖頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	位連形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	種別	
58.5	40	45	49	48	39	40	50	39	32	高さ	
36	20	21	19	21	18	20	32	18	165	最大幅	
左面 右面 正面 背面 ○○○○○ 右面 天保十九年 文政十一年 正月十二日 本城光忠墓 文政十六年 正月十二日 主〇○初治郎	正面 背面 正面 ○○董子 右面 天保十九年 正月十二日 本城光忠墓 文政十六年 正月十二日 主〇○初治郎										
1827/1840	1829	1886		1880	1756	1829		1760	1839	西歴	

				持因番号
4	3	2	1	報告番号
円頂方形基標	円頂方形基標	位號形基標	不明基標	種別
35	37.5	-	-	高さ
28.5	20	30	23	最大幅
右(面) 二月廿九日 房吉一	正面 文政六年 正月 ○○墨子			銘文
		上部2／3残存	下部1／3残存	備考
1928	1823			西暦

妙本寺上墓地G地点の石造物

10	10	10	10	10	10	14	12	16	11	10	拂回番号
166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	報告番号
一 石 室 圓 印 塔	一 石 室 圓 印 塔	一 石 室 圓 印 塔	一 石 室 圓 印 塔	一 石 室 圓 印 塔	(B) 組合せ 相 印 塔	組合せ 相 印 塔	地 藏		組合せ 相 印 塔	組合せ 相 印 塔	種 別
(62)	(67.5)	70	(61)	(91.5)	(61.5)	23	66	(45)	67.5	(18.5)	高さ
(23.5)	31.5	20.5	(27)	25	(23.5)	(34)	22	(26.5)	25.5	(36)	最大幅
十 月 廿 日 癸 未 天	正 面 〔 〕 信士				基 礎 火 水 〔 〕 地 三 月 廿 日 癸 未 天	○ 口 裏 子 東 側 口 正 月 廿 二 日					銘 文
ア 豆 が 刻 まれる 九 輪 以上 欠 損	九 輪 以上 欠 損		九 輪 以上 欠 損	九 輪 以上 欠 損	5 cm 5 cm	ほ そ 徑 12 ・ 5 cm 深 さ	5 cm 5 cm 長 さ	損 傷 部 は 下 部 に は 主 井 5 cm の 上 部 は 欠 損 部 を 久 く 軒 下	露 佈 り 講 部 を 久 く 軒 下	備 考	
1697								1716~1736			西 暦

	10							備考
174	173	172	171	170	169	168	167	報告番号
位牌形墓標	円頂方形墓標	一石室圓印塔	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	位牌形墓標	円頂方柱墓標	種別
52	51	(54.5)	51.5	45.5	36	54.5	35	高さ
36	22	(21.5)	21	19.5	20.5	32	21	最大幅
正面) 一 右面) 宝應六年(六月十七日) 背面) 〇〇弔左子門	正面) 〇 右面) ○ 背面) 十月二日	正面) 墓身 梵字ア 〇 口 三月七日	正面) 〔 右側カ〕 明和八年 七月五日	正面) 〔 左側カ〕 享保十四年 六月平事	十口(上欠) 〔 右側カ〕 八月廿二日	正面) 〔 右側カ〕 八月十九日	正面) □ 〔 右側カ〕 九月廿三日	鉢文
正面は中央よりくぼめ て、ゆ取りし、下部に圓 刻の運筆文で、持つ、ほせ あり、側面は、少し、運 筆は、厚く、運筆文は、所 作されている。 姓名は、所作 れられている。	正面中央がくりこぼめ られていている。							
1756	1724	1735	1771		1729	1724		西暦

	9	11	13	15	11	13	14	16	9	9	12	拂印番号	
117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	報告番号	
(相應)	一石三箇印塔	(相應)	組合せ宝篋印塔	(相應)	組合せ宝篋印塔	(相應)	組合せ宝篋印塔	(相應)	組合せ宝篋印塔	(相應)	組合せ宝篋印塔	種別	
(21.5)	96.5	(82.5)	(31)	42.5	(83.5)	28	20	22.5	(47.5)	(62.5)	46.5	高さ	
28	(26)	29	(54.5)	42	28	46	36	25	19	28	17	最大幅	
	「	「	「	為			火		口	為			
	」	」	」	寅永〇〇〇〇年(十八九)年	□	□		八月五日	(寅永〇〇年)	口(寅永〇〇年)	〔〕月〔〕日		
	白土	白土	白土	白土	□	□			世〇〇〇年	〔〕月〔〕日			
	伏牵のみ	塔身、○の中に梵字キリトク。	塔身、○の中に梵字キリトク。	先端少し欠角 はそ径19cm 長さ7・5	はそ六穴径19cm 10・5	塔身受部30cm	cm先端少し欠角 はそ径5cm 長さ9・15	はそ六穴径18cm 10・5 深さ9・15	14と同 講花の輪郭線が二重、重複する はそ径7cm 10・5 深さ9・15	塔身受部18cm 10・5 反花の輪 郭線が二重、重複する はそ径7cm 10・5 深さ9・15	九輪以上欠損	い九輪下部に講花を持たない	備考
					1641				1625	1609		西暦	

12	9	15	13	14	15	16		11	16		9	掲回番号
92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	報告番号
(相輪)	一石字圓印塔	(基盤)	組合せ玉圓印塔	(塔身)	組合せ玉圓印塔	(基盤)	組合せ玉圓印塔	(石殿)	(相輪)	不台座?	(送)	種別
(69.5)	(64)	(26.5)	35	27	31.5	28	(72.5)	37	(20)	(72.5)	高さ	
25	27	42	55	29	37	29.5	26	(62.5)	47.5	(17)	最大幅	
	為 ○要〇 寛永一年 八月十八日女 信		水	三月十一日 敬白	慶長拾四年 ○四〇〇儀士 位	卯月十三日 敬白	「」 女靈施主				○要〇 慶長拾四年 五月十八日位 敬白	銘文
5(5) は七 〔運14 09、長さ 11〕	九輪以上欠損 下部欠損 塔身受部30・	5(5) 下部欠損 塔身受部30・	24下 面32、5 前面 下の六 るため 天側は存 できます。 「水」は輪 輪持つ。	「水」 は輪持つ。	「地」	塔身受部20 cm.	5(5) 後18 09、長さ 30cm	は七 後18 09、長さ 30cm	上半欠損 下部30cm			備考
	1625			1609						1610	西暦	

9	14	11	16	16	9	15	14	9	15		掲回番号	
105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	報告番号
(相輪)	一石字圓印塔	(基盤)	組合せ玉圓印塔	(塔身)	無輪塔	組合せ玉圓印塔	(石殿)	組合せ玉圓印塔	(相輪)	組合せ玉圓印塔	(相輪)	種別
(37.5)	(90)	15	80	55	25.5	93.5	12	41	20.5	(78.5)	37.5	高さ
(16.5)	28	16.5	27	20	30	26	63	43	36	23	43	最大幅
	為 □口羅尼□ 白 七月十二日 敬			為 慶長拾□ (一カ)年 □月□日					地 ○□(要) □□儀士 位	慶長拾二年 三月六日 施主 敬白		銘文
諸花なし。 伏鉢欠損。 九輪下部には		はモ僅18 09、長さ6. 5	はモ僅11 09、長さ5 cm	塔身受部21 5 cm	井 基盤受部30 cm、外周12 cm	塔身受部32 09、深さ7 cm	はモ穴径12 cm、深さ7 cm	「地」は輪持つ。	塔身受部32 09、深さ7 cm	「地」は輪持つ。	九輪下半以下は欠損のた め一石字圓印塔下部に講 性もある。宝珠印塔の可能 花あり。	備考
	1646			1607					1607		西暦	

	14	8	8	14	10	11	14		15	押印番号	
67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	報告番号
(台座)	組合せ宝篋印塔 組合せ宝篋印塔 (台座)	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔 (台座)	一石五輪塔	一石宝篋印塔 (台座)	組合せ宝篋印塔 (台座)	組合せ宝篋印塔 (台座)	組合せ宝篋印塔 (台座)	組合せ宝篋印塔 (台座)	種別
8.5	(21)	(44.5)	83	16	(47.0)	(64)	(77)	23	(18.5)	(22)	高さ
55.5	28	21	24	17	18.5	26.5	26.5	24.5	36.5	36.5	最大幅
	九月八日	九月七日	〇〇〇〇 男 信 施主	元和三年 慶長十九年 三月廿日	〇〇童女靈位 施主	芳相輪 空 風・火			七月十一日	七月十一日	跡文
	敬白	敬白	〇〇〇〇 男 信 施主	〇〇〇〇 男 信 施主	〇〇童女靈位 施主	芳相輪 空 風・火			施主	施主	備考
基礎受部39 印四方	相輪欠損		「如」基礎に「真」、「五」に 「如」基礎に「五」に			空車輪欠損。地輪に 「如」基礎に「五」に		塔身中程から下、欠損 塔身中程から下、欠損			
								ほぞ径17.0・高さ10.0。			
	1599	1617		1614						1610	西 濱

第3表 石造物一覧表

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ		
書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
副書名	昆布山谷地区 妙本寺上墓地E地点・G地点 虎岸寺跡の石造物調査		
卷次			
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
シリーズ番号	16		
編執筆者	東山信治		
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会		
所在地	〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 TEL0852-22-5642 〒694-0064 島根県大田市大田町大田口1111番地 TEL0854-82-1600		
発行機関	島根県教育委員会		
発行年月	2016年3月		
調査原因	石見銀山遺跡総合調査		
名称	所在地	主な時代	石造物
妙本寺上墓地 E 地点	大田市大森町	安土桃山時代 ～ 江戸時代中期	一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、無縫塔、光背形墓標、位牌形墓標、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、地蔵、石殿、用途不明石材
妙本寺上墓地 G 地点	大田市大森町	江戸時代前期 ～ 近代	一石宝篋印塔、二石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、組合せ五輪塔、無縫塔、位牌形墓標、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、笠付方柱墓標、尖頂方柱墓標、平頂方柱墓標、地蔵、観音、石殿、灯籠
虎岸寺跡	大田市大森町	江戸時代中期 ～ 明治時代	一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、位牌形墓標、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、突頂方柱墓標、地蔵、観音

石見銀山遺跡石造物調査報告書16

— 昆布山谷地区 妙本寺上墓地E地点・G地点 —
虎岸寺跡の石造物調査

平成28（2016）年3月

編 集 島根県教育委員会／大田市教育委員会
松江市殿町1番地／大田市大田町大田口1111番地

発 行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

U R L http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/
印 刷 有限会社 松陽印刷所
